紀行類聚 乾

内閣文庫		
番號	和 26017	
冊數	2 (1)	
函號	177	1115

和歌 廿四三

日本政府圖書

編脩地志備用典籍

鹿苑院准后公 浅藻 厳島詣の記 源貞世

浅草文庫

たのむ所はまうちきみ 安藝国はいつくしままうてのみ
みきはのさすしひていつものごとく古き跡の跡なる由は浮ひし
此ほどもしのひすむかし且は浦つたひなきつつむかし
ここをも心得し且はかの国を見てつつ大和ことはの言葉をいふ
ことをも心得し又は武蔵入ほ 外國 ふるき よしみをもて
あるは此浦浪寄るや都の旅の事は浪ってこのの入ほ
咲て古よ今あるにしかし舟の中にてそらやくとる
はるのまうけなる昔もいつくしまに入金鳥院御幸ありし 平
のおかき打ちは海うちきみも露く詣せし人ゆめに

侍りけるも はかなひにかへて 清きにおもひことをまて 花田邑
にこそありひとつやいふもとそめく 袖に細くすそひ清きほ
うけといふものと申せはこきのひときおもひしまちのちく
さ東近のみちうさ稽すうは浩の人こゝろさ紀たうるう
今かふるさうせらる侍の人にそうう侍りつれきもやうのす
かあなうらに法も式も宮路命時代こきさうるをそ
りこ今既うなとこて宮にう至あるとふもえしるそ志
さしてあしうう命りし古もうきめしも侍り旅にそ
しりはふうて旅あるをなうち旅のころもうう日定
て康應元年三月廿日都をいてゝ東寺
ものすしふかのちのうきのきもやすめう法川の

過きて火の気なさう見るにかきりある海紫ふもし
かなうんりしその日の午時斗に津の国の漆つうりを
めひ法方の……き人々を箇て立つる御供の大夫右京
大夫日野中納言 畠山右衛門佐大夫 日七郎 今川兵部
こゝろはその……の侍り 畠山右馬頭
山名播磨守 細川淡路守 赤松伊予守 探題入道
今川……入道 同大膳大夫 同中務大輔 伊勢太郎入道
佐々木……入道 朝倉周防守 ……別当 土岐……
松寿丸 土佛
かやうの人々と同三人上総三河下……と定め
道は兵船のうも 人数はするなりうき……の

ふ菊凡にあのゆかりゆかし侍りけり 浪よせくるきはのいそあ
りしあとこそなりさつ人由ゝの秋の暁は物あはれにて侍りしを
浦石金鞍のあそこにゐるとて浦子とらへて人には見せ京
上京て秋をあはれしきりと
浦まてむかへるほと浦さの中うつきざし
色のなきひとなみのまちちきん
浜の人所志てに浪にかけさと福田の浦須磨の辺門浦須磨辺門
さるまれるをと見ゆ浦にて色をまる浦なるも見ゆのさまをまひ
浦かたのみしゝこゝに由ありて又日は風をけしくなりてあま
のかしてもいつて色けきふや秋中は中になりて後に浦
とかや見ゆる事は中々いふりをそゝして山舟をそゝめさる

さ方のをくりにはゆ山舟を胡に北みけしかるもさらにな
りきと紙の舟中はかりとこそ見ゆるとて宿をもれ
あるぬとぞ有
六日 山舟にて中宮まねの代なとは（ことたるし）あらぬまことやは中まて
この所はむりしおきるかさらし迎ゐの山舟出の時きつる
中の山舟をとらつえさんそしけると住吉の山神のそうてなけさせ
おもしいかの中まて給ひ死にけるか浪となりてそれより中まて
ふるりきつ中波うつとまて中まそよもむとなる見歩侍りし
すみのひつちのならふいひて物さきふといまはもれとも思さは不は
汐のかすきこゝにかゝりてあつり宇治の子取なとのやうしする
ちりの流るてゝあるもちりく流ありあひて汐さらひみての所也は

わらは稲舟なしましうはさわぞうあ下りしと言ふつらの心く
いふは大つちこつちそて明出帰ろ小島となりひろかそひと
荷もち加下ろ湊にかし蔵されしも舟子ともさと帳にあ
けてこころへより亥の時ばかりに沖の方に当て行く火のうけ不
ここに見えこれなん淡路の島根ばかりけり此舟あかと知らむ
せやおもひは

七日は晝ころまでもやまずけふの空は少し雲ひて清かなるひて
海人の家などこそ東は時雨のかの山の方を見るにまかされる
磯ぎはにはきて立てる松など見えなどもある木に眺めやる
島々の影ほの見えたるも日すこしし入て日影まえとはまる
けりかの人の心もとつら川く又のおもひ出の心もをとおもふまで

海見え行くくも辛うも寄せと言ふ心は紙にかきつけけるといふ
つれづれもこころさしのある人は折にしたがひ心もえ思ひけん
行かう紙を書けるきしいかにきこえんこともおも
ひもし鏡とよまつりなしとるるきこゆるなりし
八日の夜は舟出ならむとて武蔵をおやおもひさ
淡路島海の上三里ほどまり漕ぎてさなかさとなるべきと
島風もけしく波のとこるもの此浦にも
うしろる舟どもも
名のみしおもしさぞしもおもしそ浦風の
さなかいなとりおもしかへ
九日又おき出させて

いと清いんなの沼なといふ浦も此とほりてとめしは所にはいふ
しほらしくへなり侍りし路過て侍りしなりけり此国に伊達の
浦なる所に見ゆるを船は出き出す浦と云ふ渡へ見て船とはしる
十日又にきかさせられたからくえりさりや山北内の海かしまろ
ひろ浦ちさしこう見ゆりのとてみやうの浦とちさ花見へりけ
出の方岩といふ所の舟にて参りたり大田左京権大夫かたく
参りよりおかりせらるゝと此日おんかのせそいふへ瀧のこと
に書面をやせらき紀なる之舟元とてよおもきれしとあもた海く
さくなり
舟出のぬさも有り ねんてをおちらし紀は
きや紀書面せとる過ぎ侍る

丑時なとをしすへるかとに又船に入て子の時計に嵩浦と
清らせかに山社のうしろを見床の山藤がとを見まりと船は東の
まりに着すらるへて多かるかり
十一日山社の所よりあかりせ見ひて山崇の濱の鳥居の色にかれて
此方まうてせかへ下山社の拝殿なとにみこ円信やうの者ん
清らさ女とも見えて侍り乙れより おりてそのやりよいおかしさ
川そて安藝と周防のさかひの川の東の海つらそて周防の玉虫
東船にむら居なとに立ちて小さん白き石の浜侍る也浜か
の山なる古墓もありて浪つ浜のうへも打きかくてり此船は
印りとなりるすとてかしこをいふ海の中伯へ
十二日大、のなるとをて書きおまし行る中をもすきこなる

又あそこときこゆるもてまかそてみやこおかゆかり
こゝ浪りなるところあり 女承の
あさの名さ日は海なくそそらん
あひの浦とてむろつことよ来てみりぬむりしせ者のとも
のこ日ねんとちひ給へてつ当あて見こそ者の文隣まで
てかねの扉とこしくはる承そりし承のこ面識と面知しいそれ
こゝ切しここてそひつする常こになしひて 松柏樫なといふ
深山の若あひさりてうきまふすかきり け山の末ゐ
乃もきふ承の泊みその名となきさることをひて 松承辺しもち
霞とつきて白浪も浪もひとつことにねの漆るへくゝさ松と
此柳こつゝもの大同北京ふ文はお見て第りさ 当世旅の船

こきなふこ歌よくまいる

　海士乙女あつるこそつねならね松も
　あまの志ほ焼くりや かゝる所を

十三日 仙台の国府の南なる女といふ浦をこゝろさす
といふ松原の塩竈にとまりて けふはいそのへの 炭焼の煙
神といはひて海の上まして今のいつくしまはつしも おもひきれ
いはふそ神さひするこころすともさきるやかすかす いささ神楽
乃中と入口のやかさにかたち中ちかさし入て浦なかの（まさきの）
こさるか ほしも枝さし そむかまりて はてちつくろへるやうなる
むかしおひてさ中にちひさき社の かりさをとそまつりまれ
松かしや まる浪のこゝそ来ここゆるすて

月おもしろくかゝりけれハふけゆくまゝに
舟人ともハかくふきてそつ出るゝる
十四日さるの時斗に川尻ある所を漕出て大江瀬戸に
ゐてあまたと云ふ泊ちうの社に順風吹ちて帆さすく
おなし程なとにまさる所にあかしなとして泊のそうすのむ
ら泊と云浦に此船とゝまりける
十五日まてあらし出はし日ふけに汐かなふ里斗汐て赤崎と云浦ニ
こえて大風もふひて此舟汐ませ見ゆうこき切つゝさなかひて又岩
屋と云浦に入まゝせぬふをもつて打たる風をはしらして神
なり浪さきましき舟いとゝしふえてさて三の泊と云ふ
浦なと浪人の家ゝ築のたまりとさそひてハあたらしき舟とも

ハ海上を打きまりぬ大内もみ舟をまいらせ
十六日の朝武蔵入道や探題なと給合なとあり海風
やゝしつまりにより見石やうしは見より漕ゆのかせ
あひて吉川のかたへことそしてせ泊めいりて侍るへきと侍る
探題ハ残方へ入りを給ひとやそして世のそかりとやとて
ひけるも此夜の浪風のさハかしきことも見つゝ且ハ殊更も
いそかせ侍る又ことのもとなとさまさせこそ又みなへき人を打きり
となつ漕ゆのそりせすさらぬとかゝり武蔵入道も同し
船とも見ハ打見りすゝもてつふよせおゝかへきのまゝにとある
きやきんのかやうに侍るさんけこともまてきこえハ文言を渡せ
給ひぬ

十七日は是にとゝまりぬ今川越後入道は是よりまかりや
てかちよりつゝしゝはりしかは山そこのしなと越りて安芸路
そも過しかはうちまてなきのあかさ神も志賀ふかみえしこと
はるかりこ流りしの人すまえせよりそふやせうつくしき海る子
そも物のせはひて小文一ちより探題より流りもの浜のかいれ
くなりけりやそもつり〳〵にきこしけるとなりと備後より山
名字ぬ門か備後の兒島のほか號せ子す入道也中文の寄
右文伊予守は病によりて帰りす
十八日はかゝとの關に泊りこゝをまて大門一それしよの海越ゐて
賀らうらさと申ゆふ船おもひ風なとそて出る石清ふ
十九日はかとの岸より周防国やしろの泊よりみいつねあきかる

こしなといふ浦に泊る是をせにかさ岡の方こゝからていふなり
まさきるふ旅は旧えらの浦のせこ二上まさうらのせとえこし
つゝの世を行川なりけると聞ふ前にて泊しと聞方なる
しひけり
あさなきに海人のかるそふとしほ草
こしや妹との葉といふらん
秋と思ふかさしもやせなし旅衣
とろてよりしきあまの浦風
二十日いのもとえて門の海多つゝ多きて泊りてみつの
浦といふ所にてまゐらせ東風もひて泊ありき是は志つゝ
くかしせ日宮の入りを風すこしなきち又四年とまりせ

かく歌よみてゐると雨風おさまりしかば船にもさいき
漕別て出舟いたすほどに、きよきなき次は舟を網にかけ見て
つなぎあれは、ちかし舟にて、そこかしこの海の浦といふ所の近き
たふし、なかなか山際に雲しも残りたる様に見えたらるまで家
おほきなるを見れり。又ところによせらる
うれねするあかつきと思ふとぞいふや
明けぬ歌よりこ舟の内より△
あらひてわたる舟の沙まてうつるといへる所とかやとも
廿一日卯時舟出、風折吹きりて出舟の前の桂吹折きりいまさ
船のわたり備後国尾道につき、夕日の頃ほどは太平ちそて
讃岐の赤崎の峯まで見わたされけて山路とせり何とか申す

しらうき
いたしえまこころりしまでのしきなきや
ありしかはらむてふ海人のうき橋
廿二日卯時に出舟者何となく心地もよくおひ風てけしく
浪荒るなりしかば、帆をあげてこきゆくほど
さかしもきびしくありてこきゆくほどに備前南方へさして
小の山との島ひの山そき所とかしまの内へ浦磯とて西浪
のあらそひとそてよきの浦の南にあるて、ありとしてなど
ふるきしる船の湊とかいふも侍り
為にて折りその志からのうしほや
たこのささきの名にこそ志りけれ

讃岐は北にも如ぬ所つまとふ須磨まうし須人の家のつまひきゝ
仰する事ありと三百とふあしまも侍り松なとおひうつる
とやさてうしものなりけんと覚ゆ右風景とをけしくて
たて侍とひてうさ津よりもなる浦をり舟と寄てあつるせ
其ふ四むくへとそてる、あまともりちよりなきさのひかりとそひ
てあ西ませのひてうさつゝ文てせ給ふ二星中客せのひかり
西の割り書そ寄りせのひしきの西山の事に見へさろ山はらの
さぬきの院のおりしまし、きん松山志ろく、話なと云ふめり
流きんむなし北舟の名所とて
よし松山の浪とふりぬる
廿三日はおて、上生海り給ひて武蔵介右边てたろうミ御流

皆もろともにや何のまよかなきん潤とおさへてまなそなと也西
廿四日おほひてかの中宿といふうちなとこえさらにして侍ある
其まも北泊といふ所になりぬ
いつ常とてうましものとよも北泊
ともふ事りと北をて泊れ
今朝いつしまといふ所より大松なる助兵衛にてもしつふ
まうて給十歌を如て文作なり數寄なり右風の如石を
舟の内とたて詩のすこし其のときて舟を出し北指を
りさつくにもとよりまうち居中いるのいましきつて玉藻
其六日は梅をおもひて桜一金堂の沖につりさかな松原ありて出て侍り
う北泊とて福きも如ちまつせのかはさ文福風あつく

浪士にて兵あしらふ稀なる人ともいふ故に稀なる所
酒なとも多かりき赤松殿ひきつれいらんしける所一時
斗有て討て其より紫路との所をも日々に淡路にいたる
に侍りし人々は此之
備前 後衛和尚
左京大夫 御沢大夫
畠山七郎 日野兵
赤松 関口御沢兵
其外 古山隼河
なと斗なりき其人々のそのことも云ふ事のせつなるさても
武家の人々つくりのやさしきあはれなりいと皆ありても

毎とかくや此所ハなにの見に常に津守と云ふちかきにてまり
ひて其の時斗にありひて津の国兵庫浦にて旅のいこと
のまいりても其日数いくせ日数をなん
廿六日なるに二なる人々には廿六日兵庫に着ける
細川讃岐守大内左京権大夫なと御下向とのくにまかりし人
畠山左衛門佐 同左近大夫将監
山名播磨守 土岐伊予守
探題 同中務大夫
同右衛門佐
なに少出てる廿七日にはなとてそ京へ入ける

路行ふり

源貞世

二月廿日の程都は霞にゝの端に残月はけに中なる川
に渡わたし袖のしかはくいと新せき旅の衣のはさ立袖もまて
かくしほれまさりて京恋しく路も涙の八重の汐路にあひのしほく
思ひしらせまりて日は山深につきぬさしは物く同なるまし不
なきもとは友の名残にやことかりぬ草木の色もいと心ほかりしは
の里の芥川にかゝり時めも鷹の身の行末いくと覚束なかりし
川こやのかといふ本の行末のねん侍るそてよそなく聞り
うね気色も今は浦さし
かゝ中荒しかりてい芦火くゝ小やの中にも無とや言まん

川はふをひて仕源ハありとなる山の名高き手向あり
の人に白語侍るハ昔足姫の唐の三の国をさらへ給ひ帰りね
ひきたる時此山に鎧かぶとをなむ埋め給ひけるより頓て武庫山と
申となん

此歌も何うき浪路のさかひ打聞されもこの山風
古集にも入江のよるよみ侍るとぞ

武庫の浦の入江のす鳥ハうはかしそ立波かしも有るなそ
うらての沖まる迄ハさいま中将の歌すむ方といひし芦屋
の里になりぬ山迄よりこなたは猶きはちかき松陰に生須磨
まひて名所々と立る弥北地の名の此木をやかりしおひ
てより林の松原と申なる

君か為かへる事は此命にハ神も心ありときけや
るとかく此国須磨の名ある浦は須磨なれはますおの塚そ此の
名たちの村さちきる松風かすりてあとなとよりも家ふとかく
哀すくしからしたしきまて源須磨といふ所に一所に侍りて昨し
は家とうり給ひ侍る友たち一人ふかう今ハと別迄に
行とていとたかくはやきしといひ侍へきものとなり

旅衣須磨の袖の涙須磨にかへる月やかまん
須磨となりぬ秋の夜ハあかつきに見えと月の有る此の
かくいなきれとも山をさかきる家ともの枕なるおけかる庵垣
折ふつ竹のすりきのうかりけて見えるなるも浪むし
の松まし秋の夜の思ひよそへられかるさてそ月屋の跡と申

いへとはれはあれはてたる板屋さへなくまいてちかく人もなかり也
播磨ちかく行かる海士の釣船見ゆる所しられの明石の
すまをさし出しきえ浦伝ひもおもしきえんりし山もとの
海つらとをるく行ことにあはれ今宵といふ所は松の木
くらきのもとまても心とまりぬ隠さと名のおもしけ
なるをん心ち地やあまさへ旅人の有をもうらく心かなしら
浪のより来る船なとたけし　あとひおそりて所は
しらしいそきすら如十うてなともかる所
白木取よくあらのさりの侍らん明石の浦にとれたし
古の名も見え見えてる心地して哀なりしきるん也
ありよこみとりの松年かりて浦風なひきなをてる様

よ明石打過りつゝ村々なとさてり益近の奥飛も所々にみえ
けり須磨にては敦盛のしるしの塚ちる跡もありとなんてことに
みえ給ふし播磨路にいりて川も心とまる所こそ侍る
南北といふいさらる松に路て芳葉ありなく浜芳枝さる
て海おもえいつくもいと興あり
勅ならは国治よといふみこ躬く浜茅の原もまよひなさるらん
おもろみ地なとおもふとてそれより南はあつりするるを問し
此えさへ海のことといふなちかふすこし過て兵庫といふ海
よ出てうちきちる地をするまみえこそれ須磨と明石の由やしみつて
つ行すれは川の道ちつく石の塚一つり荒神のいますは処なり
はり出雲路の社のほとあり。こゝに南る地のちかさあり三侍也とをみゆ

とる旅しくふしけ路を初て通る旅人ハいふまでもなかりす
見と爲そ石の塚と立てハ男女のちきりのま給ひらして
通るもとやしらぬとかくちらしいさきつきふてなん侍しまことや
けふの東社ハおとちらきふの海の中に立てひさらハ名もにま
なひ侍らひとて此社のゆるき侍るとなん申めり行くるなる
申なりく
侍べきつく神代のことのまいひとゝつを埜ひの往も見し
あとといそき出ハその和ふるゝともいふまそ
旅なれハ立けても袖ぬとまなの松のいその波のちてもみえぬ
それよりはるかさま慈の丸といふ里一村侍るいかなる人の物とふまて
名乗りかし侍りつるとみえてけいとおかしれ侍りき

夜ともいかやいふなる旅衣やたゝ解ぬ立のまの袖をさ
めるゆの名を変侍るも先思ひめりかさの侍るやまて府津
といふ里ハ家ことに雨のとらめといふ丸と侍れとこれ之ゆり
山の麓近しの松の梢まより海すこしをりしとみえて面白し
そ白い鳥ま立見ぬ家の軒となりて民の竈よ煙をひとゝ
織之名かしおひうりちれよりは方ニ川なとのつらといふ
古き立めりめや東海のこの浪も見ハましらは
かゝ川とやいふ水えそてまりて沫とみてハきひ沫みちけれ
よりすつ夜の鳥立たる鳥の中にとちなく立の衣をさる
張目見も立なきつゝ旅のぬさまさ加十まきの中と侍中
とけ倫おとの二の出の中なさいなかりぬ菩川いおとに変しより

打て細しおつきするいつきの宮は紫をかりしきしきやこの
男共に上矢一つも手ぬきて此より川瀬は水かと打渡て隆蔭
といふ里にとまりぬ
武士のたけき名をあけつきとつきし矢陰の鹿さる辺さ
佐藤になりては中〱名高き方よりも西向き木こそ多かり
けれ入海おつさき塩をいたるかよ沿めぐりに海人のすみかも
の山本なりさきもけしからぬ便をとへ此足門の小ふかりて庵の名
の浦に出る其ぬ塩浜の所はちいかきなしひて此塩浜ふかくいそわ
このある山のかけにをひし敵に斬せらなしひつあたわす程の
程をすくる所しめより彼人ついに入うこをたえて野夕波の
こちらもいとちやうか遠く風のきさみひにあつるひて行かう舟の帆

うけもいとおもしろかりきるにちれくたし浪の舟も見へさ
出たひ出かるに一歌のうた詠さる名ともの中ていさめれはこの
うら出ひひあつくもなくふきさるこそまうふめうてはむひ
さる方によこたわる塩山をもりし此をと見しける人の歌
の浪にすくる名の源氏の須磨におもろの男子入ぬる海人此も浦と
なんよ為おりてそ思ひしるよりやそは此を浦の浪とふ
とそ塩風をもかすりかそ揚さつるけふの末物いれなり
は浪に浪風く為に一日二日のたとに必田の浪寄るといひる
うちつくかりけるもと見れは有にそれいてる浪く あまさ
え西のりみちのくの塩釜の浦見えて此海人もすむへり
かり方に付つての日のひまもなくて色好風のつかり名に

うらひ侍りしにつゐのとし津をもかさねあつめ侍りし
女はおもひなる夜なりしは草枕旅の海路も何かくるしからん
今又よをすてぬ命となるさへかなしかりぬ世ことゝいひし紫に
中にも別也の跡たえてもかくもいそれさりしも今は哀き
桐も侍後は鏡に涙へき文もなくて哀くまその筆とり出
さる文もそれとおもひて涙の袖とりとさえおもはぬ人に
侍しはおもひける思ひもあさましく侍る也ひの中の画の
中に細き世もかはりやは侍るへきかたへ見えて侍るまゝに
うらひ侍る也
いかにてよも跡の中の昔にあふてはにならはすくる　うる後
津くしとみえりの雲に何かに手は世のうきこひいそさん

津くしとみえりの空にあふ手は世の跡にひにいそしさん
生まつる上の九ぬ代られはすくなかりけりもいかりくとそ　あはれ
乱逆たる世には為る事ともいふより不は涙にまさてそこひ
しぬ悲しきや元暦九月十九日由は乃の后よりも安徳天皇とはかり
西とかうり侍る頃は東国ある山西のほとに落させ給ふ成
文にてひて旗旌をうちにゆくにも吉和とは宗の祖なる人にかぬ
日も無ぬ父子月たちて流浪のよしもこり旗と旌やりつまし
西海中に沈みかへつきぬ沈みひけける跡なる人たちく沈むといふなり
まことの師走にふるくといふ過多くよりまて又のとしの
隆月又例の侍ることなん見えさにいきれ浦の苔ひそかく
侍るなと海人大のやこそれより南に大波にかゝるさひとは

名わかの浦とそいふなる
膳氏袖もぬれにけりあまの女あかりの浦の沼の彼方
ゆかり有まうしあける山路に松や桧忠きれりていと面白き
おの江いときれとそのふ
川さゆる河まのあ門のいと狭いあれともふれなける
むかひはしきと施てこゝら山と人の浴にとえもさく
海はと安藤のさひと出るすこととも山中に出ふきる
きゝて代替まて入海つきて沼田川の流れ落合てけり
渡しにかきいて侍るわと日暮て夕暮のて山の端い
そくろしくさる鴬出て花ちらひつるとるもかき
て山里に松の木ふとそもしてきむりふかけ川流くきりーと

うちひて物海さつあちそしけるは示は寿永のむかしまそい
海の底まて侍りけるとて石のかさりうちなとてかきとつかあ
かしおつきつめりもるまいてる山ともさかしかしとまけりていと
面白しけ海まそひて西に年かけける松山の中に神の社一ッ
そりたいしの天神とやと見えいろの立に神錦葉へ河さき
見ひなる時まふて旅のわれひ気せうらはかなものいまく
あしきとかむの時うそきまりて今の世まて侍らけるにや
昔とその古しきとも社いとひきりて側におき侍ら之みそこ
小かて安清水をよむ中の天神のいえつりありむし
なひけると中
さるいのる女のことも 神に海清の流りるましきまとそてまつ

けふはなくひて田面のさへのはのこかゝ色の中になかりなく松や
竹なとよそけくて草のたゝ一つそり平家の世まゝ沼田の何某
とかやいふこそりしたかと越後の領主乃七兄居しける所とや
めり今も志ゐりかゝ田面にかゝりしいふるきかたを絵なと白り出
まうるゝも侍るよ矢の元力の役之人て侍るとなんその所すりよ
萬わといひて田の中よ人あまたありとそてり
袖のもよおしひもかゝりしあやめある沼田の田草かくれつて
けふ南よ万の非ゝいそひさる中に男山もいまんとや
物むそよりても首の男山田にまなくはせしいのりは
むそのひとよるとそゝやのみことゝのりはとゝゝめつらかとも
人とりめ侍るへき心なりけりて妃そなりし人を有

しそり心をもて人なきて照しけり詠みまいらせ侍りまし
七月七日よ白梶の葉にかく歌七そ
あまの河羽の橋や渡すらん七夕つめの袖よあは世まて
にけしの淵や我こそ秋の織女のそふ渡ら瀬のさかりなきれは
まつ為る心のするよも逢ふなるへきものよ向の文字のときゐる
宇なよりや打れまし流葉女梶の七葉の歌を作せて
時きぬと渡こそ渡せ元果のいとそゝはまさるいとの志め人へ
おえまくりしみやいそいのしまし秋は紀候葉の言須
契ありて秋はかなしすと七夕の松浦の川をはゝてるつきの
流らしの洛水とかしこみ入侍りけり
まつきの廿九日安孫子の里をたちて人肥と云山里を過

侍りけは昔むかし小野篁の旧跡とて堂有。小野とも申侍る
とかや。大なる山あかりと称する岩といふ里に至りぬ。又の日は
お日山といふ山路に忍び侍るに、ね覚の川といふ所有けり。もと
を梢とうつろひたり。日影も見ぬ山中に谷川ありて
かれこれ流れて岩にくだけ、苔むしたり。あはれなるよし
さとりつゝ、岩ほの上にしばしやすらふ事も侍り
ところどころの紅葉の色もさかりなり。お日山越の秋の名残へ
此山越のきはにてかの里ありけむとを出てもとつ山の御陵をたつね
のそのあたりの山の西に見えけり
過日かいるをくやしかる浦まで出て源氏のさかりなる林下
に入海のひろくとをく見えて小野山きはに下る家あり

十日斗も有りて十九日の夕暮の月にさそはれ汐干の浦を
ゆかむと何となく西に向ひ佐西の浦に至りぬ
廿日は厳島に詣で侍り。此島は家三つ四つ斗漁舟ありて御社
のうしろにめぐりては松の岩ほにぞ生ひてむすびたる
き[illegible]ことにおもしろく、東にさし出たる山の麓に此島の神おはし
六金町とて家中に小島のさとびしければゆる一つ侍れども
なんなる島といふなる此島の名なりといふありそそ
いふなる
鴎ありとことといへる伊勢物語のありそ名に負ひし
その鳥なりとて見ればなる鳥見まほしかるのせそそや
かくは思ひ侍るとかや。海の上に出てのさか

ひのえ也るく路ハうちを波比社のやしろハむこてハいはのうへに向
ひたゐのちりの下まて汐満すなはれハ海の中になりて汐の
四方に入にともあまるまて千石限なく侍りすり石浦侍るとて
やかいみ比天ゐりそ比おつり濟めくりつゝあゝへにちに侍り
まし久とえ秘の友も左ての本やし息して侍るは宮迹跡也
なと浮不忠侍るをも日蓋ぬ下を開し言まくす
めしを侍りし所とそえ浮おりふさ板まりや侍りて此寺の
を図濟おて佛舎利一粒東ち納め海に入なりぬけしまの龍神
一しるりとむ乞ひてこそ保るゝかとし汐に向ひて船おそろ
侍をハ藻屑の由るよしみけて侍るなと船子たのいひなと
てもいひをと晦侍りしくハ世やりの汐のまりのちやきはハ

磯きハ汐の道に流来侍るかとて船のあまりよく侍らずりぬ
ることハよるそのうみとやとて
磯際の好る所ハなけて動く本の方は海に向て猶あさ
此浦ハ四方に山を打ちかこいつくと汐のくちうち通りんと見る
海中に此嶋も侍る也けり寛平の頃の名古の島の栄花亦と見えて
てけ世の中たえて侍りしふりてあさましきまてそ見えし
此日ハ此所由を出て此の西南と云社の西ひさより山路に入など
上お国の山中とてふて不に来ぬ廿月の末の日影去りしと
許りて木の下露ハまことに笠も忍ぬ程に行ささ荻原の
芝おりんとさされたる中に檜の葉の風さあらくなひきて松
の声山河の音とりさかしひしる能からけ身にしみてあはれなり

さにくはしらぬ命をたのみに我身をそちにおかつの中山
むかし誹諧をもさんとまうしなのゝおかつの中山かくしるさん
京菜ある侍らふ逸向の名よまうしなのゝまうてといふ事
のふと思ひは歩侍らくよめる和歌けしとけりて又海に出さ
りしかとも おかつの浦といふむかしのは農鴻山の南のたうき
なりけり旅の〳〵て打眺可らなりしかるに入も猶さるな
の浦と出つる夜の大ぬ今も今も嵐に帆もはしらし西のかた
みなの人ともしけ方に申かしそそおこまめり
おかつの浦とこれらと云は山祭のかたえの氷名にあつ
けふとものゝ中に能京田いとなみにするとそ嫩の色のなりつ
深くしうふかけしき乞あらん人にまえ西母かりゝ地

波のことくにはやくくとえへつるは海人のあまにたく火
なり乃りそれなりむすさいふな山路之沖乗ふえ河こえ宿は
松あとい乃て浦ミさみけさる深山なり大谷とそ営まるさ山
川流きむかし高光より同汚のさひと戸の獣は多田とい
山里さそまりて明に又山海に御の見なん名医山なり皆
一路さつある紫の原さなりし人難をふる山中に深山の陰
とお機に君えくれ仍わそき山脉之夕を散めきと床こう
さし出つゝすゝ滝の声も嵐の中なり
名ある月き宿ふるさと汎泊るつも名宝山ぞなわや驚さん
立帰る世もあらん人なん名宝山まうる友にせん
たくち称のこと帝につけよや何しもあら君なく山も見ぬ哉

ぬとかきこえし岩屋山とこそん日はま向にせよ行てそその
こちたくよろしく侍るやうをれとりとまらせてよのあかなくる
くと契りて又海を坂といふ里に寺の侍りしにとまりぬ廿
一日なるに又の日はきとなの浦とて山本南に向て八幡の社
いまそかりその前の海の方ざまひの方にあるかな津くたなる石のさ
化ありて見て侍る見をきと石といふとかや人ごとにきこえ称
せては夏花しきや廿日まて上矢一つなりね
その日は豊後をとて富田といふ浦に泊りて光も小舟をかけて
入海なるかみてあし日の名をしらぬかいろともあつきさ
ふりそ中に又いつくし日といふて侍りし泊なるあまの
舟とも風をむかひてはてりけるままに面南風に寄ほり

そ村ものゆかしくきこえひ侍り
夕汐につきてやまはるかにしくゆりをやまのこその入りに
廿四日周防の国府に侍る坂の樋も南は殿にて有る末
岩ともの墨絵よかさるやまんてゝるを中に大なる浪は
眺めて松の窓なるに言海の城あるといふも雲ゐもるまに
打寄浪見てくりかのすそ木あるといひ除しめしは侍り
海つゝきなるいとたるし光かり外の海にかなそやゝや
りて浦の名とも外のうるといふ横浜くりたる九程に光る坂
板坂とぞいふ
荒磯の坂よりも猶足引の山くちもの坂てたるしきさ
此坂こえてこそ西のみなとに入海あり東西に山さかし九国て

そあ潟之西東の中らひに二つの湊ありて舟も見とめ入けり
打沖の方にあらはれて見えけるは潟も七八町斗もありて
みな西山の流れにて又人の家居ありてあなたこなた打山の流
出るをひきて南宮の神の社立てり此宮の作法は二千余町の湊
をさまて見えけるを南へ落る二つ三つ立て山へ落し川は流て
末ひて流て行橋をかけ渡りその西南にさし向て立てる
松山の侍るを見その山ともいふ林に松原を遠く眺めてあ
ふりは見るに夜ぞ坊中に取る之
花すゝきまそをの糸とみさすがに吹この春の山風
此月は小屋を出て遠く月の七の欲漂ひて打ち
その浦を行き潟へ入江へ右の方平なる国とゆやする

雨もおつさるお蛇の濱田潟とかふさはおほ川にて流れ
まて咲の雲のとかふて流の音も又楯なりけり人のさるの
頃の事と哥姿乃そうなり
大潟の浦に風の強くて田潟を渡るつるの流せん
その時かさ村のあたり立なしひて梅や桜のときなしりぬ
花さへ咲をひつ秋気の風も色も朱をも春秋とかく人
能して西印しひさと切りたるを汲酒の庵しとて以
をひていさかる山路の如く岩間といふ所もまた此方も打ち
しき潟をとて遠き千潟之と欲ふ香河とかやかしこに住ける
外の一村侍るみこしと潟のちかくと見えてさるとは里人いふ
は椿さきさきと云

立帰る春や待つらん梅か枝ちるかしもとへゐる所
まことや此月はすこしかさまとはすまとにいとえて山深
きなとも侍けり
八日は夜ふかうなりて出はなれてあるにをいて霧へ上り行ると
いふ中山にいさゝか道もなくてちかう見えしのかくしけるに
へて山川の流まして鹿もわたる見ゆる岩淵にさてよかすのの
あふの又もけふと斯はかりとえてぬる大方の山のたてすむい
は東路のさやの中山見えてまよりはをすこしわけゆくあやしき
山路へ日中は中山を越て河さの渡と云里に着ぬむかし板うち
の橋をたゝる山きはにしてまつの侍るふもと誠にうてありけるの
あまる流はに昔見ものゝ事をめしふこうしするとや

西へ行る云月の代は出へみえん衣おほえて又わさの里人
此の日と打見ゆ風雲まれ移りもすゝら打連れおもほえりて又あ
りつるをと移見浮き出はれかたけらし山の背をもよ邑のみ
かりて里ちかきなかその中もえ移りの紅葉ふくも興あ
て立まり行のをと相坊とやなる亀浦波たちて雲路も
徒見ゆ山ちかくなえくさり苔むす空なる十かの山は松原てよお
に社に八幡とて神なる道の前に西東へ川流て橋もかけたり侍
りけり橋本して大なる舟見えたり松原もなえたり西吹風
あらまし吹荒けて笠をもふきはなへ飛んとつくしてこれを
過と云也りしに打出侍りさぬ数はすこしやそて又ふ浜ゆきかひ
さの砂の色もことにして白浪さもの岩のま千鳥のむれあそひたる

しほりみところ侍しかとも
何以色もとにてあける浦津寄られたるのかくさせいふりつ
波こちきいて干潟ハ見えなくとちまちて侍るとて又此浦を過て
小浜と云浦里に出てり松原とあるふゆるて七つの里村なる
りぬかを過て東南にむきて前岳なるさしと一村すきて神功
皇后の御社のおはします社ハ東南に向てそれより山のかしらに
こおはす鹿よとを出て山といふ是は浦の見わたすさきの振上ある
なる山侍さらしさきもいひて別宮のうちもゆひある所こそ千采
の海の中にて十余町斗隔てて浦二つむかひ古の満珠干珠な
るとて今ハおいつやいつとうやかのうけ浦と櫓の浦といふなるハ
皇后の人の御付のさしいひ物の名を櫓と云させおはひたりける

よりかへく名付けるとかやさてこの社の
おのれの名の御連月正しくあるにあり此社ハ何かと思浦の大
内の泊にて侍るとやけ此あたり御船をとめさせ給ふと云松の松
なといのも侍る此下ま玉完宍浦の四泊ふ此社さて世路
ひさち見るに神功皇后とやらん神ハむかし西の夷乃あらか
かくしけるかきれちらひ侍るとあるをきをつけても筑前路や
松浦とおもむき侍るさま異の此御風治めひ侍るかたと
古の此あたりの四十八艘のふねとなさくて云世の和亭とする處
西の海やおく海見ちるや帰る神のあつめしふねもふ
香椎の沖沖潟出えてしかのことく跡とゝえれ隔て
旅まよひて花ほさるかに詠よりて此浦ハ神や志のほん

此国の一宮住吉明神にてましますおほやけ当社の数にはなりて
わかるなり

八雲のおひ風吹ててのみ神代をてらせ日の光見え
末の代のためしとて千早振神の中にも人に逢はれは
和光の光とそなする白波の沖を見の岸をあらし月は
神垣の松の色はかはらす世のためにこそ言ふの行やまさり見え
新しくは此国のみとみそなはしもひて行なりけりても中なり見え
さて夜もすからおほ御前に二心なく祈のひまする時明なる神
の御と一向もらく祈り侍りてかへる　去月十二日は住吉の御日
にて侍るは彼家に詣侍る本社よりも猶かなしく神さひ
ていみしくみえさせ給ひしはおそろ事ともあまりて西の

海の道にて人をさしつれは松浦人の舟をも指ひしを此海の底に
まふてし給ひてよ所にかへり侍るを一人明神の御かたそれにすけ
て又一首詠してまゐらす
夜の明けそんてきた神の社の前の神の羽風は松を吹へき
はるかの山は今は九月に出る浪の海の浜より守久と言侍しかは
よ海はしらんとて舟に乗侍りかの肥風なりけり契り我の夜を
齢八十斗の翁の髪しろけ白きに烏帽子に浄衣着たる一人來
のひ右の袖をひらきて見に寄て舟おとすと云ひて袖をかふ
りかけ見ては順風吹て出舟をはしりぬと覚ゆると夜も此住吉
の大明神すとおもひてさめ侍るやうて吹風よりかはりぬとて出て
日の内に周防の国松をふし程まかりぬと語りはしる事とふと

云ひおきて侍りしわたくしにおもむきのちをかきつけてとゞむることは舟たゞ
もてなし出侍りしとて心かゝるの浦より使来り小船にて天河とい
ふ所をとて参り合ふと申しけれども如何なる事の行ありける
ものと思へども行かれ月合の夜も更けつきには流あまりけれども
覚え侍るにつけてもしばしおもふこそ

秋かぜも張りさゝらんて河の水の小舟は今も通ふと
松浦舟をや漕ぎけよ天の河帰るなか中の流るらん

頼方明神は七夕の日祭らるやうやうのぼりは謂ふに諏訪住吉の二
の明神は軍の神のをさめて足らずやと覚えてあかみなは
りける正月十八日に詣でまつり七月に勝侍るのとなりて皇后を

の御為とて神に法楽とならしも胡より来たりの時にて松浦あたりや出
ぬ事となりしに神は神功皇后と言ふておはしまして詠みける　二首

神風のさかりは吹ける胡人の使侍つる旅の船では
勝ことは々里の外にあらまし浦ふく風の道へ行きて

しかりとも神の御心にかなひける舟や如何に舟ともおぼつかなく侍る十二月
今日松浦よりの使に侍るに来りあひて将軍の御使は送
よりの舟どもあまりに波久しくなるに松浦のとまりにぞ打
寄てとりて又人々の議定もし侍りけるに小さき浦の沖に大
舟千余艘通りけるとをやしき方の御事の道にて云ひて人々
何の心もなくたちかへりて侍るなどと又舟はよしもなき
知る事舟ども出て行くかひかへける人の目には舟どもみえけると

つやましくて松浦の軍の定を又改めさせしを神のちかひとや頼ひ
きこゆ殿下むかへの舟、おのおのしるしる人の松浦を無り鏡ひ
侍るつもなき神、の御ちかひ殿下にハ必神と渡らせ給ふとや
せはかくある殿国の御も神くのちひ皇后門にしたまふこそ本
いふ九日　松浦とハ見ゆるなり
五月の廿九日長門の国府をおて赤間の関を移り見ゆ和布の山
とうやうふもその荒磯とつゞひてさやそもの浦に汐みちさき向
の山ハ先おむ長門国の関の人の家之り湖の西ハ八町とやふ
めり汐の満干の打といふ潮の早瀬ようりも折おちるきめり
さても穴戸ハ浦の名とや侍るなり今の赤間の関門司関と
のからひハ山の名とつゝきふて本中に見ゆるに汐の満干の汐は穴

のやしまて侍るに庭の東西に人家しけかりしより穴戸とハきこえて
いふなりけりそれを皇后の宮の御舟渡りなりけるに御舟よそひて
ひて後一郡の名をハさし穴門の山ハのこりて今の早鞆の渡りに
成りぬれハ山ハ二つなりし西の海中にありて嶋となるもてけ嶋のむ
かしハ柳浦とて昔さと門裡の立ちる所なるを今ハそこを
捨て門裏の浦ともいふ赤間関の西のちかみよりて嶋の先と
在んいふある村ハ柳浦の方と見ゆりけし関ハ山の際に家く
家となりしひて里のやうかる山に阿弥陀寺といふ安徳天皇
此浦にてかくれさせ給ひて後ハ御菩提のためになさせ給ひて安徳
天皇の御影像おかし申す本尊ハ清盛公の福原の持仏
堂の阿弥陀仏と申すなり又小松のおとゝの本尊とそさハ御仏の

りそめし世なりける安徳天皇の御事いつくしまへさそ申
申おき侍りしわたつ海の菩提なともしひさまり侍るにいか
如世々の契にてか侍らんとそ覚え侍るつ国の実はしちなにひ
ゆりをつきさま山高のおとて山寺ありて人のかよひ侍りしい
とえんなる所の名なり
海とさへ隔てけりる山高のおの人のもの人ねの声
まことやこの　しかと宮戸のにのさや友の浜のさわらさは国
門おて侍るなるは鳴の長井とちやともの色ありの沙ろさは国
しわとそ侍らん覚えつかなしそて何の代まて侍りきるやらん
関国にて門鳴の長井を縄しておて里女の浜に打あてかひ
て侍りけれはちり斗もすたらかはす侍りけりと聞えんいと

奥はえるを如下けるは皇太后の宮国をして見て侍るは後
り侍るに十二月の初めより十五日まて一家の御神の皇后に
たけしまして神事侍るとかの里の人は侍り次足を
洗凡男女のまさもせぬるよそ中神のし女かとも御衣をかふ
付すなとて見さるけぬるなりいとあはれなる志ありの
海なはしちやともの浦の汐さかりて千いつさの底もあらた
なり侍りけ沖の石にゐかゐ侍るを一の宮神主取りて海れ
出て汐を取来侍るとそしけるかとされて神体を見へ侍るを
昔よりいまに絶侍らすとなんこの末まても存て侍
らは行末の物語にもし侍りまし

高野日記

釋頓阿

高野山へ参り侍りしハ年ころふかくそのこゝろさしてまかりける
墨衣を身にきそへつゝ阿かりのおもてにめて清そ哀とおり
高僧にわかれてちかく西方のえらふる地とめましハ立ゆりつる
かれもおかしく立ゆるをよくしつく月は縁元をいうふと
これいとおそきの財宝にわ家いかなからでもふなんあるらむ世に
そそうさ立のふきりてつきて昔今の事をも思合せ折てあはし
形も夜もあかして法ま身をわすれ思ふるさ夜をきをそひらかり
洞はふかくまて志あるけふ高野はあまの志のまきをいはまかり
しこえ侍りておもしの院にては晴つらり風も身にしみそ鳥の声

かさゝそあり

〳〵ありてはあけぼのゝきりも晴ぬ下し
ころ嵯峨の山里に住のおほゐ川の紅葉
名もしられねに中寺の鐘の声はしそ
あはれもかなし梅のしたゝみち
庵には梅さへ生ず帰る寺は
あけのむしろも涙にしくら武
秋の月西にかたぶきやまの庵にさしこみしは夜しもかなたにて源光
の庵に今枕はふし侍りとおもひは川くの色をそとみる日の
旅ゆくのことに去りて侍りける
つてみるに稀なるひとを見川の庵には

あさくのとうけてむしろ座敷
やとあるは夜返し
さなり出山庵むかえてしゑも文
にしむそと思ふあるかし稀なひを
営ぐたゆかし庵に入ぬ源光大和と名おて焼つけの灯を
みしかば七条人見西の庵に住院と大師の像とうけて仏具
さり中にある机にゑふかつらかりきましおもむきひもまい
らせ上人大にうけそ常にもうつして此像周副の筆てそかは
しまへとそよ御つくに見えて西住上人につかはしを送つて山紫
を周副法にいへるを法勝寺坊の大の時横侍りけるを
住の御筆にて武者小八寸かはかりにて侍りしとつたへてありし

なり此益軍卿なとゝいひしもさる事に侍る水無瀬殿の
孔苑軍と云動きにて見侍る西洞院にや何ゟけにとも見えし文
なとも見え侍るゝにて見侍る周副とは三筆一例と見て侍る
さるり隆信卿下の大宮の院六年を移近軍の見えたり
ほくのこともにて日華之大方には文字をあふましくなり
法性寺殿の御筆をまねて手に侍りける筆つかひ今の世にみえし
世の御てにてもさるかたの猶くいと口おしくなりゆくめり
侍る舜光院の小坊主にて見侍るも思ひしやうにし
信実卿下の元応年中の四季の屏風こともを書く同筆の御製
御とゝのへなる何かにて御筆も見えしさて尾上の浦の
田上の川をも近江の浦そのあやしきの跡も浦ゝ跡の

岩本の色あひ水の色まへ其のなりしの筆色とかきけるにし
いまもめてつきてるやうに侍る隠岐院にてもそのはなはなりけるけし
内々の筆をも御手にて法隆寺殿とあてて此も御覧あひて七条院
へまいりてとかいふを御なしなり侍らされて御覧をいたしまし
しとて私を見る世にいふかの侭をうけるさとひらも御いつれ
安嘉門院にも大宮にて何てみえさせ給ひしかし大師は此の色とりてもかし
法性院の坊にて其何色の絵所とかかるを及ましうえて侍る竹
八條院は床と見て思ふるかとかた文字をのむとみゆるさまに
せぬひしも其十つゝかなものとなと見ゆるもまたもひかふるとまし
のかくれその中に七十まもたけ殿つる侍の家はと海家と
いてらるもさし麻ちの次第へてさやかへとも見えぬしこよひ

国立公文書館
National Archives of Japan

かきそめ侍るハそのあやさや旅人と乃してハちらつハやまとてみの
まうけ侍ふとておれ数にありのひとつもしとゆとふ
ものねを（十二三斗のこ侍とて朱めり教まの風をとゞめ
道の岩りまとこそこひ侍し御ありて文このさいきに世の外
心細くてかゝるゆゑそなしもそて人の身の宝ハのうりし
侍るとて三人こゝとそハめすみてうみ海象の縁ある事
そものさまふ申ま大師けゑ山を切ひらきとさせ給ひてたて
させ給ふ守けなのたゝ文字のりを志て林ハ志ありあひし
まゐるりりもありとていろはの四十八字をもちらしいさせ給ひ
よりこの世の人の助ともなりぬと申し侍りしかハさうハと
たのひていろはを冠に置て四十八そことつゝり出し新おこ

に侍り
今さても佛の法とのとめは安く今となるかもあ
ろもひも楽ハ今て法の法只無きまかせてそゆく
道意なる国て消え人家の身の命と池の主りを志る
にしへ消月日の陰ましとてよかひりとむく事はられしき
ほのゝと明けなとなりもちハ月も遠くしさの山端
無きてなきちゆひと消もたのもしん志すも志ぬも自他の縁
とても世をわまれをいとふ身なりまハ人のそしるや嫌かまし
ちりひまてせるかハ我も十仏より身と往生の一声
万人こそ乱うるまふこそかよむも今の人の楽れそて
いる福て法を先世の中とさちすハりて哀とたるへき

るりの色の思ひやりてゆかしきは西に澄む月の影
をなかめて弥陀のちかひをたのむはやかてそも帰る人の心さ
わかれぬひとつの心と思ふは只一声の名号にこそあれ
かゝる家にさそはぬなしひのむなしきはまやうき世の夢しかまし
世中はとてもなき影の出入捨ぬるへくるしみも多し
たまさかとて名号をとなふる心にて他力さのまぬ心ありけり
龍も外流も清く出にても名号をとなふへきとるへきかは
そしるとて慎んのみにこそ身を捨果ぬるときもてるるま
川ぬに家せんより極楽のをききとやく命あるうち
ねさめする時毎にとなふるは是こそ弥陀のたよりなれ
自宗門弥陀をすけ思への外はあらぬものとおもひぬれり

楽といひ苦といふも色のみは身にも露も弥陀も帰す
宗の色と思ひて秋の秋の月にや雲といふはさりまし
うしのまし嬉しきことも思きも千年をと人そ捨人
今そ知るつらきふるき身はたのしく誓ひそこのむたよりとは
恨の世を猶も猶かくる身なりとことのよろこび思しよし
扨のひやる今さら実さびしきは独行人恨の世の旅
見るにみの涙とは誰かつゝみすへき弥陀のちかひの無阿弥陀仏そはうす
山深き人の心は中々にうき世といそかはまりもかも常し
まよふとそ誰をとも思ん親さるも我身にてはぬ恨の世の暗
けくすゝる人はあまり秋の月なきや出ていてもかくるまもなく
ふかきひさしふかくうめしきりに風さそてもまとふ空のしら雲

こその為に偽無き世とこゝろハ頼みさへまつりしきに
えぬ人もえらる間も一こそ唱ふる弥陀の誓ぞたのもしね
てまさひしまおもへハ名の文字よりも唱ふる声を導とぞ頼
わかれ世の闇にまよひて消るハや浦山かぬハ道家の露
ささちりて郭公やせる人その身ハちつて あらども
きけハこそ聞てとりたも投し世のうき方ハさもわかれハ面白
浅さむる鐘のひゞきの音耳にその暁を待まても別
同しえても身に吹しも名のとふてうき人数の方ぞおもすや
弥陀の名を頼む心のかゝすハ身の答思ハそも切ても
声すめやあられこも なき人まよふも頼ハ投のなかひ有とハ
えらひてハみさの光やそてもらんみさのちゑひを頼む斗ぞ

一声ハ唱ふる名の数多にハまことに頼世を志るへとなり
ととむるも頃は比法談もてあけへいあさ名ハ唱へす
そのそなと哀ふも なかるなん名も弥陀の心なのまては
すむ人の夕くれさもこゝてゆかしきいかつゝこゝん忠山の記家
きやうふ無のもの弥人も名ハおもへハ皆むまれむもちひぬれり
あをめくらちらちとくれをとしつゝハ前のゆくふもなし鐘の声
正定と記しけハ落葉のきへの露霜まて辞めにて見るみてる
かけろふ木の間より横雲ひき乃ふえの声しつる秋て
君んとそわしらハみとそれ業ハ津

寛延戊辰年曲極五日写之

香花園高氏

筑紫紀行

宗祇

二色のむつひより幸の今になるまてはるかなる也一節ハ
且入江の芦のかりしける泊ひ身と草のうきたつむなしき
犯あらひして移りかはる夢現の中にも時にそあるかな妻秋と
哀れ也思ひすてかたく侍るまし国々の名所をも尋ねゆかし
侍る頃ハ筑波山を思ひ入ちよりかく白河の関越えて北国と
も見侍りしかは今ハ松浦箱崎の所まて見め侍りしも深く侍りな
かゝるとき世となりて所々の風きこえて志まりくまて故のうち
も彼のあさいにいふに侍るは筑紫の藤といひて侍りしを思ひさる
また京兆のかゝりにもしてちきりふかくして西の国の坂の上ま

てをたのむ舟渡りへることとあるき袖もなく博多の海も渡り
ていたまいとうことなきかくもかくとなりぬきは文明十二
年水無月のはしめ周防国山口といふところ人にあらき
このもとにしはし有て陸の宿所の旅情も志るしなりてわこ
すこしひろとこゝろにそ終へかはすに月日移りて長月二も
なりぬ南部の杉生の松につけて志の家に志けき便かよはしけるさき
をまち遠しくおもひ立ぬる人々はわれをもはるかに見えまことの旅の如く
文もとなくありけりなくなりしを殺して思ひす断ことと上く
二の所の志侍る也如此しはまそらて故に三条殿より
使ありおもひけさるへきことにや天の羽衣なりんとかわりこ
ちて墨染の衣んに身にまとひたん波優婆塞の衣又何とや

いひて納涼き川と琴の音志るへとこのめの峯ねの中路につけ給
きんと人ことはりの出し思ひ思ひいつるかもなき心情の道いたらひ
なりる十一日すて小陸路わたらりゆしき宮のそう紀も
長くきて赤間やりとまく時く去来之宿坊と院をあしこ毎
やかりてことふきこへそり深く情有りくる之すて小おある杉陶
尾張守弘護門威徳も護代もわたに侍るとおもするいとく路
すへきのりしくなへりくてさる程に民屋一村在津の市と云
赤間川流海面いやいりて曲さむしりつきの浦も宮社なと恍
旅宿てあやしきつまりるまいうらわか漆河と銭も程と
門司下総守能秀館より立をやめ云事にかれわくも宮か
きらり海面の詠てうちそゝき侍る関條陸の門に泊り由

かこちの人〻家〻に宿り侍る程もなくうち過ぎ過ぎはおもひつゞけし此の
朝旅立ちてまかりしに道すがらはけしきかはりし有様の心のうちとゞまる
小松村といふ所の神にやと大なる石に木綿かけたるあり夜
なる月清き二つの境といへり。これなり山中といふ所に座すらひて
り通夜の設せさせて道すがら御なる社ありて由緒をかた
りて夕日かくれぬる頃松虫のなきからしぬるも哀深くてす
ぎりは有明のころなるに彼淋しさの暁に祢宜の鳥をへてなと
侍りしもうつひおはするにうかうかとあるは山深く水流るもあるはひさ
しなりし夜の山田に庵のうちなきなとする所々とさて
兵庫といふ所に着ぬ。おぼつかなくて能く侍るべし山里と
みて吉祥院といふ今雨ふりのちさり万里の前のかすかひは

ときは有明の月さし出たるに神にはたゞにらさぶらひける人に尋ねば
といへるは祇園の牛頭天王をいはひまつるなりとなんこれは
ておはしましまする人といへる所のやしろに参りしはけふや参り
すべきなりし侍らば
吹しくるいなつまの雲は山を隠し
田家のよしみは中々そのゆく所とかへりて暁にて
まかり別れしかりこちまかる所の里にてそ今宿とかい
ひてたゞ塔婆のかたちみえる寺をおもひいりもて行ば深山
まいりて深く谷の音も絶えずうつり来て彩る乃色も月の
ありける中やでの見渡すにはいふにけふ山のすそのの浦へ旅人
をむかへて世のいとなみとする海路の波も静かに下やり川を

あくらふと云浦にあらぬ浮しま多くつらなりて波の上風静之
京便する所此地と知る人への家に住しふ夜沢鈹の化比す水
むまやまいかうめ離るゝとおいなり渋りて舟出し侍るに風ひ
く成ていふと便あつるに寒の御舟の浪なれなると云る
も何それ之筥の御下の人々には法けなとひしなとたまひ
あへ
気中しきりさえと漕出ていは浮うけし人たして
あけみ浪の上の浪と出てこれは汀の松陰さかりつて激風に
煙立たるも乞れし船子たのうらうら見えかり給ひし中に
りつ沖中なる所に満干る玉とかやいへる二人の浮とえるこ
も屏風の人々さへ言はるゝをも昔をかたりしいそ行舟をおもし

待るにまてこ出発す仲哀天皇の皇居は豊浦と云浦なし
高社ハ非持文天皇にたかりしま浜社を列対面して社
宮の西浦実説をや六十に及ぶやとえて何となく社の
際も別るゝ化比して待勝にて見侍る社家は幸あり九日の
花なるはとしはいうちに体はゝ月秋の気おかしき所に海の
上もなきいふりて乞すあり社拝す

月にこゝ夕波さむし秋の海

明日はおもかし社をすりて社司の志多くうちつられ御供
などまゐらせる所之社は様つ田扇のうつりて井垣に
こゝき松の葉は海のこずゑとふかい渚になひく志深いなるを言をも
るいともやまうるき浪の内社は第一社切留居 仲哀て皇后

ゝ皇仁徳天皇ハ上の社ましまして八幡宮さへ廊ありて一社なり
秋白ハ昨りの秋の海之とるの葉も南社にハつゞなきのし
侍臣いふこれそ仁寿の献律師詩にましてこれも社中
神さひて本陣き松のひさしにも志をいつわりし別 神之回廊に
むくくにハ見れ給日すへき事より 侍臣ハ
松風や常ふも 神代の秋の頃
いきふといふ詞二ヶかよのつきや摂社ハ神の第一位大明
神次ハ八幡大菩薩なる応神 神功皇后 諏訪明神いま
小柱之和光のちかひいつれもおろかならぬ侍臣とつきて住吉明神
ハ文武をもつかるさとハ歌道の道にてまつる人はさる神
のことを記すへき事とそ見侍りかくて赤なるうちも実ものより

まかる始のゆきあひ矢のごとくして春さ過しにかへられば
追門と伸くむかしハ若宮之その方十余町と見へ田せ地の
やうりハ河原晩ちをよつり堤のこ山こそ嵐そふきて舟なる
舟漕しゆきいるみきりのさかたのつゝしの堤波をて岸辺
生する松の根さしもおふくて なと哀ひ知るかくる心地せ
見あつりて梢波み 波をつるも中々あはれふかし 住吉の
社の作りさまこまやかなるも風景とおもへるままやつ国の松山
そむかひにみえてあまた海水となかむ昔は仁徳天皇の御宇
とみえ侍臣ハ語りてちるこつし ふるさとゆひとけて待まさひ
まするをつくしてれのをり日に節をお語る侍り昨日の白ひ
あいき事しつきなふてまつる事としてたてその世の姿たおつて

なき世のかたみハ只此をのこるまてなかりしの身にも見ゆる御影
押へりしハ次ニ平家の人々の影あり新中納言知盛門脇
左文経盛同義及行基宰相教盛中将資盛能登守教経
次之女房にハ大納言のすけの局と卿て宰人阿り中にも教経
武勇の程すくれたりきこえしもかゝりしときこえつく
様子ハ定の壇あひに消ぬ名をあらはしたる御身
乃ちに浪君の御事ハそのあはれとの数に入給ひてはし
高倉の二位の尼君の波の下に極楽侍りと申し奉りしも
かゝる波に源の千尋の底のもとに侍るも此身の外と
思へハいつまても浄土にあらん誰か仏辨にあひまつらんや此詞
を誰の程にハ侍るへき又此所の袖の門司御尉家親なりし

すへきよし傳へハこゝろもとひ行かゝりし地なりし杉入ぬ
是ハ月さやかに照りて海上のいさり火たきまへてうかる浦の
船多き中にありてすきこゆる声ありてまたや叩船来住月吟
前といへるなりしんを吟せしさきに磯かくれの声とうらせまる
礁の売れ集まる折ふしも元蛙の鳴きてするも涙を
帰乗のとらしの関やるとよめるも此みの哀さえ吹る程
増ふく今を發句
船乞へて帰も此戸に浪風
翌り又門司の總能秀の舍を今向り
戸ノさし世の閑に関も名あらしく
向るさ夢かゝる宿の亀山の八幡一錆を昔の程大橋を

のぼりて見れば数千の人家海川にまじり大小の舟出入
ようくりは社ぞやひやゝかにて石盤山といへる所にほひ久海
白くうらかひし夜むかしのかゝや姫の竹きん蓬莱の玉の枝
まかなひぬかしく文字そへて神を祭るとぞいふなひかくて

秋たもとし衰の上なる三松の里

津とのそぢ従ふ能勢のもとに行きしと出で立ちてや
て八幡に詣して曹出安徳天皇の内裏の跡とあるをみ柳々
浦といふ菊の浜をなかむ日河のすみ待ちに行の内
にて一首あり

花なしの茶も松もさゝれし浜涼み

福より花まで若江浦といふ所此所を知る人壁の他

り見守行る事もなくとりぬるを足みて桂木やる所につり
との海と見るに垣隠のけむり蓄つる入日影福の稲文字
なりけり二人は彩筆家をかし人々は道は数の雨行き
来ての者ぬ出でくるかとよろしきみにて嶋もしきて
のがさなりさるを見る月の光り多くなりしかと頼いは十三夜なれば
とく句ひと

名やいふと宵は波の秋の月

此辺は海晴の月待ち浜てとることも由この関とは延し
きて菊の花を借み咲きとさ募り謝ならさかとこゝに扉と
京の扇と赤てはなくて我見しは川田行て行きは三ケ寺
さし作り鍛ふ扉の冥助かここそと初めしくなんこれより

る護所陶中務少輔弘詮の鋳させ侍る鐘の銘にかゝりて文の日
夜鐘かゝりて聞くへきよしいへり抑節千年陶少輔杉次郎
左衛門弘相なと見えて一折あり
山路くるに民の草葉の秋の色
この世の光なき八万性の栄花をあつめへきの処とひるも昔
く拾ひ侍りし侍りしさとそ一万の経千複盤に侍るは見るも
なきかしも侍りて見るに此劫宣時うつりぬ十六日杉の弘相の知
行所長尾といふ所より志賀川のあたりも文とうなん
やはやうて百韻ともしも出来きけるなりけれは
又宰府にくなりつゝまつ天満山の
見むる宰府聖廟へ詣て陶弘詮より侍る文添ふるしかし

ちえきなしかしてけしき山とに湖路かゝりぬるのみそ
落る色く面白き見るはなれとも谷風けいしくかむそゝろされは
岩の梯かゝる絶壁まつりて急なる道の千さへも凌て
世の中はあしき山路に宰府の外もさら見ぬ身こそ
あらはれさうに此御社をへ陽法なとつくりより折
て社おもと拍して安楽満盛院と申のる經営にて此は
当社の緑起などよませまする祖は浄妙院おもとなどいへる
この殿の御国に扇とそへて光る御宿社にて扇を見するに
筥の蓋にそひ奉らいそ社感ゑかうてなんつきて社僧一人
と伴ひ社おもと詣るあひその奉在にて入より此処く杉杉松なとひ
てまいり中志たり在橋まわりて二ありみうちたつ

その中にあり池のめくりには数株の楓の林となせり見え次
西湖のさまにまねたるやと見ゆ楳つたひ入るとかりしくてあた
の西廊はさ流し右にゆくに花海若むしてを松のよはひも
ふりたり揃南社は池垂の宮と申す草剣有となん例の
なるも古のいはれはまて見え申されて看経し侍りてまうて
只神のうるはしきかりのなる西行なきて涙のとしけん
かゝる所とやなからさりの事はいてそひ侍る尊信敬の念一両
にまうせて
曇なき波と涼しくて我見るや鳴これ秋の秋の月
浦風の八上の秋の仰もなくさしつ池のちしさく
非やまする又まれてもかうこそあるとさてや芳洲の君

従是宝塔社並星霜ありける中に安置すらなる麿
して尾おち物せれて忍ふ字の像なきを申さんとてこれをふ
物しにも修行者の日の影をふるへて読のこいたしてありそれ之ほ人
丸の木像ありしまたとおかれは西別南社の合祀之と申く
菓ひて梅を志して紀白也に
は日宿坊まて参あり
そうも幣へぬ幣は物しの名家に
翌日又明けの菓として一社あり杉弘桐合祀に於合せていと
この奥方合とはれは記者をたに入ねはしちは又智て守の宮
なり白鳳の中の草剣に御沙汰堅く斎しそうさとて池
ゆきしは社物とよめるもけ亦て読むよし万葉集に侍るとや

法華塔婆回向皆残もなく石のこと首のかはることへんし侍る
執着の衆生はたゝ靡せる事なし　それは阿弥陀仏のおもし
まれ無文形煙戒桐須弥さのことくみ法樂して　のち阿る坊に至る
南寺は昔は東大寺の末寺也　彼所清し坊の花の本之古き坊の人
なきあとは花を立燒して　えんなる花を盃の面をへなることなく
みよしの筥崎なとにもよんくるく種々名をあるも猶の其も盛なり
かくる坊あまりなき也　大かたの深川なとゑんつて室坊とま交
の日弘桐の花を紀基坊といふそ文一社あり
深川は昨夜の山の東の南
今年九月はまた此川しらくもの祇之中そ至別当寺に参る侍
法師あまりの名宗のさかえをゑんとてあひ供ふ部局に法院

なりき　大川の流は袖のうへに落つゝ深川にそゝぎて　むかふて名ても堂
の宮居本尊の御てるを見て　境内皆秋の色くさりて大きなる
あすへの数もて見る都府楼の月古へとおもひ　能るの雲もるもの絶
え安らとして　秋夜常とするふくて　もなと出外の名残も
法の御ひかりの雲かゝる種々の星あれもて　いつはまをあかけ
よつえるもれそらし
数なしの身とも　いつふと人目をて　いはかりなかる
かやの関銭るときに大なる悦あり　いまも其のまゝあれるの
とし昇れ世も天智て宮のつかさやのひきるとなり民のう
せへいかもうつみとふ事てかなしすへて出家となるへは民の
法なへと云ふへきるをさそへる憂世の理とおもひて一天の君万

出の民いつもつねの限りなかりけりまほしからうの回説終えろこも只
常なるものハ山川土石のミなりけり我すてこそふみて行まと
没するものとなりて一夜あかしとえむすぶるまじきすとそゞろなる
偽りなき名所の後ハ訪ても人なしとおもひつけり二筐の山の陰
ときて文殊海のすみまいりてつるいなの色々かも名ぞぼえかりやとみる
まし道行の法師名をしみてたくひさへ行きかゝりて少しの別れめき
くおもひそれ伝へより能にハなくおもふなり錦木のみ沼の
わの旅に物多しおもふ名所のいはゞ語るにとゞむる深き一つの寺之
宗つゝさきる山寺をも悟るとかくのことつさきつるのことし奥ハフカキ
方に方丈僧の語るりうちのかすか行きへあやしかしそ庭の草
木ところゞへつる萩のいく草かうゝし露もゆかしき数多竹の葉風肉

盛かくおそろぬへ之包地もさぬ旅枕こし塩竈にすむ人にて
ひまとを送えと見てくるも和し得ぬさいさ河の夜と見信るよ
あこへ浦をるふしてしほがまの浦と見えしして沖には大船あまた
かゝりとうてへの宗らんふもたいそれとなきおもむき翔
きりに守り大いなる塩竈の松栄えて行くるなり仏閣僧坊数も知らし
人民の上下門とせしへ利とゆうさひてそのさかひ前にて印し夏
より秋いおしてしほがまの明神をして盛るなかうちの風をへ涼しく府附の
ろるとて和の塩竈さしられる社の明神の三ヶ国の坊ありそて禰
衣の人もえをまれりしかかゝきる名所までも之似し旅にいはなる
法川にも見しかりぬ花くさしつとめてかれ名きむるなとも
高こそやかり塩竈の本とりなくへて衰之社いそるとさ本ふて

その跡をうつし山岳の大木に倚りて此ふかき方に定めて祀らしく
当社の内庭のくさともなりねとをまもられける社人宮座に入塚
起れるしるしを絶さして方かたみえて但る社中社外の並河なく
ありて今はなりぬ並也て縁はさせいふ芝生よりそのころ明まち
くえて笑語の松まつりは香椎の浦に立さえ申る頃に
西かた淡り年地のことくして木の葉より落きつる雪ちる雨い
たえくさなし海の中波をくつきて浪の上芳をれ明るいとやかく
さも志きぬれは
浪風とたさのき海のなかをも浪たあまあやまるも来て
見えなとみ縁と漕ぎよる舟の内にいかにも定めよりひと返り紀
して其葉も只は渦にありけるも定め年を語りては不よ立

かの住吉の御社に詣りて見れはあはれつきせぬ御まへにふしてつゐる
さる松の下に立ありしかは楼門も消えて社壇もまたかくれい
つかきとさへは十三七何まりの世の中のうちえにかれ枯とよへるも
かなし御前の形この坂の外の事なり社中をのみ見えい
一本の松は坦まく坂あるところもあるとへは雲のゆとは社上か
さる紀て造営の時なる時もなき社の荒れいきゃの下
そも勅を停の定まる二三年の寄にすこし以て起立りてすくる
ぬれぬれよりはいかさなとも思ひおそろしの上永享十
年の冬をいつり今年まて二ヶ年にその時松と切人といひ勅
定の傍に去年せかきとてありし波をもおもひて此の道
の社の語なりのりしそて

神垣の松を引寄この柱もちくるゝたゝゑやなきとゝと
かくて廿三日の旦夕中尊訪従の之へふとさきてとの次の宿と
りことに
ちるなしや神すみこの月の面影なくていつやとえ
ちまないはることにちるなくな千四百より松の枝桐家
の千句あり中十萬善秋の句と
夕浪にかゝるも秋やかしの海
千句は三月十二日は廿七日にいとゝなりて頃の事いりと云ひ
すゝ色は其の松のあいましかも又とねや其の流を一折あや
め侍ぬは文の日
秋晴を見ぬ松のあらしかな　無帰凡

明ほのはすきは其の松原へとこか田行さきて立出侍るを大なる川
とうち渡りかれ左に一村の林あり加茂の御社の社殿まいりて
まうり此の浜を塩屋おわりく所のさまもさびしけなりぬく
汀を面白き山を浦山といふ汐こつ時は山をめくりて明のことし
千かり汐みちくれて浦に浪もいそかしくつゝ西浦山しくととと
いひ見かうしはかなりて行ることさへすくそてやりて彼松原に至る
其大さ一丈斗もそてら浦風にかゝりけさるも数之入て社の
神は熊野そ杜りしまんと社のめくりには古木あまたもり
立木の下は茅原之頃の成るの名跡まやむしり松さる絵の末
葉かうち立めりくりしまはき中よる洲初音のまもひきらんや
まそみゑるそしかゝさき女なん侍る御神のいきよとてましのひ

きえ松はかれて其の松をうへまつりけるとかたる老ひ
しきもありし

かの上人のてつからうへし松はいまた残りていき残りたるもあはれなる
ミ㪽ミちりよそひの花紅もみけなきもめつらしくてえそなし
と残

咲きちりぬ花のすかたもかはることや世をへてまつの松なそ
えんある後にもとりせし誹言ちの読を手習なる者の詩
よう来る是は路頭にあまるとのなみ思縁にまる涙たとし
ぬまして花の衣のつきかりしんやかそけ不悔させなま遠い井あ

えるまさる秋の花乃これよりあるきのそとて汀なる木の下に
茶をもしろかてもひくすくめあかるも晴れかりしこにいそくとるき
花なりし昔かるる跡に文捨ると場かりぬれは寂寥なとといふる間
のの月を非といふるすこしあやましてそり名のの哀みいへん
かきなしきかる足かも悔きて秋の限に夜深ていとし紀神の軍
さそみのまそなれや

こひ風もなれさし花に君をおきて行方もなき秋の
ともしと　退し

君上乃こ花はおひく行跡に浪かさぬ袖る涙なるらん
又の日神無月の朔日は同しく時雨の空よりあからさまに出ての
いつとなかにかも近へすへれぬ道は立つかたて花はなへの名残も

まず之ハことなる目出度と専ら乃ぞそこの松竹をとれる安
けるそ松竹の人のいふとの葉ふ顕してなん有ける呉竹の類を
移つてみるハて何ひけ古来和とハ称かして此百年に及ぶ
すこの松の木之昔の木ハ枯りけれとあひつて木する事如くの
ことし木のもとを見れハ而人二尺人一尺ハ大人又ハ二葉のごとくする
なとたとへハ其の御の義刑のことし実万代も猶さんとぞそ
うし出る天神政の清か通ハなり
一本ハ此を定めし高砂や松ハ古すも神の志るしを
あらかしこの陰に一村茂かるうやなとの河るハ哀也るきと乃あハ
松すり和ら包って志る人此社之清世ハ紀志る松在
見けん志るしの松ぬ丁え松之三本一本さとそり志るし村

気とこゝろし
古への清のさかし秋の高砂と清の潟よ高砂の松
見けくして玉家安全の祈りひとめ千しかくて神のあてまし御厳
の大なるを無をいへ志るも造営志るしかして玉とそりける末社な
といなりそなりても仍り御厳のつらなり潜生る迄古来なる
こなりしそて此いさこ始之御厳の正方ハいぬ井よそて志るしの潟よ向へ
海の中次第にめくりしるき海岸の浦のこそりし志るとの浪くてこの
山くなとの直をそうけりていつまても名所なりと以かしとかし住吉の
松海邊なとゝいさることなりし同じ如き風景ハいくめてまさるへしそ
伝わる社のあすかとの神さひ松のしろきするハ又住吉よるいふハ
伝わかつく見えこの浦のやそら極楽ちとを利南社の神参寺之

抑此神主の許へまかりたいしれ先此神の事を問ふに中は神功皇后
左は宝満宮右は住吉と云大菩薩にておはしますといへり
さてしの松の因縁の次第伝へしその後に生ずる不思議などを
静にいつきもかくつけ仰し尊る藤は海つの乱しき文ゆしく
て立おかれは名日の事りしとかくりて為す似たる山折りこ
こゝとよみ山之その外の社へ名号の其にありてきやさしくいとと
くひなくなん俄に涙落きてあさましきる風にたゝしき
の世とその手書の袖なれともなくなん人へ伝も持まひりる衣
旅下用意の命と
松の事ハただなし世を嫁れ時為に
松なれ枝も同じくこの命ニ所へりけりる 田折の事なれ仏れと

枝を仰りえより名もしふうへ伝はりたのもしくなん松といふいふ
き男多く酒おもせなそしていりくと云るる為てたすもかときる
多くなん拝をむいは雨もふりふりて給へえもいとゝしきとなの
廻ハあれりく立出る段なし桂てさる後る河々香椎の宮の謂
りぬ衣はいつにも河へ廻きしく社のみなは深く竹ちゝ
山あかりけおきる橋の事も流ふりても別ひ昔のこなたを許す
とえも此ハ厳ハ造営なりてふもなしてかり殿の事もおろそかなる
かんつきのたたすも為けそ物ひかるすも哀なれはいとそ
昔おもへて神の御枝なといへる松の栄ていさきのかなふてひろこり
つる此社に何そとせんとそ衣この枝をおれる
行次清湛多枝二首 並思ゐ添て 香椎の枝に松

伊弉諾尊の神ハ重母又八幡にておはしまし同し御神なり
岩屋にてハ神功皇后と申しまして重母と号しまする神也絵
島ハ松にてハ松之こと路々への名所なる風情の松の和歌多く
のこり海面に見ゆるハ淡路播磨之須磨橋あまの子ども、
住なる釣をやへ舟をも沖にあかしけるより此山の中
ときより海際に出るを見しとまて見ゆるに星の浦をも見
川すみ風起りて波たちつゝ又おの細きにしたかひさき魚の包みのけ
磯をわたるを見るも又波の上ハ猶まりあはれきをいとのおもしろし
いかんとえんまの浦の山くり浦又貝の売の浜に似たるをこれハ打寄
られて海に離れまつらまひへなりけりのうちて海に浮るる橋のは
すへてせと見るたくひあるとかゝるかしきものハなし世にいふて吉樂ならに

此之山のおとをとりよりしけまよひの浦ハうくへ山にしといへ只浅貝の
かゝるをやふ色かんに浦といへハ養老の浦といふふちなくもいか
せ貝とよのきは
けるそれ名高き浦浪にハらうを貝多の浦にそてやかてもある
んもりなしておまはかりて宗像にまつりぬ神をも詩道て
と抑いある禅院にやとりけれハ社ありて北ハ浮山のかけりて地ハ
平かにして床高けき中にハ社ありて回廊ハいまふ破らて自
露も多まりかゝるれとも厳ハ廃せる所なし大きな川なかれて
渡りて何おハ反橋たかくかりて古き社と見えてさる御神ハ
田心姫と中津姫市杵嶋姫も一所に鎮座し給ふ御兄弟
の御神之兄弟すさのをのみこと御むすめにておはしまさは

又ミちの行りなりて
人の代のすゑまでまもれる事跡神のことをやめしことのこの
後世の宝位の名をといひて人のせといふ事なり下まつことにはる源
氏の元祖と申す事との起りて我家の建言はすさみとのことて
にきいまゝりて皇祖神の御名とせるも皆その御思ひ神代の極意と
仰くへまする中や神を家系なとさるまたと見えもあるしとると
如法くしてなきしめこ例やさこ、何し源と申すか自ら隠のみ
かきさ大昭なとハ又この我いこはす道ハをりよめるむりしを云ても
な後志賀の宮の西向かりしなとにいひ申侍る彼か武のむす
めるのあられいつくふ思ひ其をこまを大将のなとしたるいか
申ハ道断りきんしてまた頂成さへりし神の霊もいそ志らさ

上手達のひとつふたつ書なと吟味もいかあるをまよひくるとり
家なりまては
道ある事ともうち絶て大将のうとの上もなく説を云ふん
族の事ハいつとなく世のとかりの始さまなかつ世との事こと
なと何もなひなくさめ侍るとあいなしうる者共のひとつは
歌風の道へとのそうちなけくと思ても我ゆへ上こそとおもへても
あちきなし於東をへつゝなりて篁像ともいかておそれ侍らん
なと申るハ多くひなきれと名所なしぬハおそて皆々次第
そのをのをのうたも其の家々へ又ハ大家なとにあれハかひある
世に侍るとき政事をかしそ風雅をつゝめる事あそ上皮へ下来ハ
敬信の心あるハ後の代のひとつハ詠歌の思ひとの道へ来ハ古への

なき世のためとあはれひみいふかはせて侍らしかくきえもよわりけり
如十徳海の年頃も堂の事ときこえけるものはいかと詠
この事ましかとせるものはいかとよめりと云り又いひさうしけるもの
いやしきとをへあしすやけんかくて程なく松風
はなりぬる跡たくとして山のことくなりしを村雨ともいひき
くちはてる民の家居蛋の苫屋数をつすり川のむかひは山隠し
なりて面しこすそかさきおりて時雨いさゝかおそくき夕月秋
のあやさしのおりくさるなすとつくり合せてるやうなさの浦や
きといへることえりありはなくそえりて哀まさりけり
住むるぬあしやの袖も哀なる月やけつりといと八峯見
神無月と秋といへる源氏の物語にもあまた侍ふや須磨

須磨浦まうけして哀の色まさりし方にかへりぬる哉
とよみ侍るは
追風はとまさぬ出浜の寝覚哉
又ある人侍りけり
いつもきけん芦屋の月の夕しくれ
又の日須磨のさむらひ人をもて松まつ山岸のあたりにとゝまるしと
まつりするま汐くみのかれて毎日思ひ日もおもむは月の光
をまつ又まて菜の言演なとはさやうにこそすわふれの海士の
いさり出るの塩の焼火なとえもいはれぬ哀に秋いつく又ぬ
程は秋さふしまさて彼あはれさもさまさる如月は入方の光きよらし
すまうらの山の松風あるとおもひて色春ゆる如きは一日を

もて七日の行さ為義集への近つきのゐる平氏の人々の
志つを先示そと云人のありし侍ちるもいとくるひの事之なく
なん木浦の住てあよせて二三の神主のもとにもとりし中より
起て説經院明獻律師の坊にありぬ日比のまひのすの國文
語のすなどもろもろにあ讀して歸る事あり

送り来くを歸宿するも旅雨に

今日の道ハ波郭を又色状といへる坂ふとなき道などみちて知く
何をひを行りて明の苦ふもろともに松花へ入見の山家たな
といひし家之山里のあわれ風流みせても見る面白きすさ
りと見わたし這ハ梅桜とはて只景とあつめて
むとおもふ成長まだかる事なけれんやハ新色まよふ薫の

離もしてさし此書なる道ハところどころ多きにあるまぬひする休るの
茶もえんこ居りて一つあり面白き諸け花とそ山桜そ
松も大き木と見事なるにかと云ふ道も分行る木にて新日
のつきなきさを知る意なく侍るや

休めし　と兼て云る　山路に

一ツなる庭に竹林あるとそ尽するる人々兼てあきら侍ると
たつえさ来る家人なるいふて今此頃一人なる文の日ハ春
うち於淡なりて梢へ入て香なるこさなひに波合てつくりけ
よきあとにそりかりつてやりてまつ侍るハつゆあくあそう
にえまるところありし　こいひなるはたらく雲の雨を見さし帰りて
のむ思しうなん見るまで日かそうまで二十六日まやめ侍らん

このわたりはなかさらひとつ寺山川の外なき所なれは
何ゝの宿をも国々人の家々とかいまみて越や若狭の水を
うちきゝつゝ太行の道すくなきをされなりくてよろつの川を
との旅にたんぬる事はしに春冬月十二日山口のやとりに假
りし此度の日記は書しそめつるてあり

維時宝暦壬申如月八日於竹叢亭之燈下写焉者也

宗祇終焉記

宗長

宗祇老人年比の草庵もものうしや旅の外のあつま
ちし過の春の始の発句に

身やことし都をよその春霞　宗祇

其の秋の暮越路の空におもむきしは霜をもきかゝる山の名
とふたもつましくて越後府に至るなりことし二とせ
ありそれぬときこえて文亀のはしめの年六月の末駿河の
国より一歩をすゝめ足柄山を越ふしの根を北に見て伊豆
の海沖の小島による波小余綾を伝ひ鎌倉を見
そして左大将家の其のかみ文九代のさかへも夢の間の名残
して露とのみなかきさの松苔下のいはぬ清水こそちりき
るもさてお国へ帰る山くの木々手まひ思つくの名残をし

いらこの海をうちこえて伊勢国にいり八日のこなた山田館
谷許楢乃とかいふ宿にて八十島二かくしいれて旅行人
も多やすくハ渡しとこゑさかゝしきうつしてへありてむさし地
伊勢も今迄に無事と申しく七月廿日頃に銭はのこりいう
以宗祇九条に入て十月頃ゆるゝかとうちかさね教の
あしまし侍れとも御なの長路の津より廻船まかせ
来りて日数なりぬかくして神宮寺あまりまとゝさ
りてさりハなとかのひさちぬる事とて風もはけしくなれなり
渡のはるもおほつかなくあちこちいそきくるゝ人とて人あり
てかし聞しの旅宿をかさの主殿の宿るまゝて暁しきす
まて大磯にて日比待ぬ世の人ゝとかゝる事ハあらすと侍

あへてまして免えりにてある人の申すに
知月ひ陰暦の月なるへハまさにあとのすゝきれいふ宮のや 宗祇
そうとむかして去年の十日已刻ばかり地震大きくふしてまこと
にかたとうかへすまやとおもひゐること日ゝに此家もいはれを去
すまり六日うちつゝきぬ人民おほくうせ家くつれぬされ
みしハ旅宿さへふるさとなりの上風そうとめとせて宿も言
ぬ元日まハ宗祇義然の発句ふくもしてあり

年やけふあけれはいつの代の一夜書

此の一話の後に

此の長峰八十年にはへくりくしやせてそ
旅たちて見しやみもりし念も

宗長

とぞ侍りし

いかにして八十年ふるにも八十年に
さくらをみつゝ花のうへこえ　宗祇

わなしき九日の旅宿にて一折つかうまつりし発句

青柳もまよふ面影はなし　宗祇

この心しるべうつるにことさえありて風さへくはゝり日数經て二月のまつりをとこなれと都のあまりには
うつとて上野出羽はといふ湯といひてありける所にまかりて
人のうし思ひたぬといひて宗祇老人猶しばしかくて心あらん
と頼われと今宗祇あやしくもつかうまつりけれともこの人
あわれにもさのみいとまつりし御文数へ給ひて也かし　宗長

國よりある人ありて猶るかたのつけかりて下さなかと言へかり
とゞまる文あるをあはれ侍はゆ御たより富士をも今一たひ見ん事の
むなしきをなしかもしらすて思ひつゝむもつきえ御心に侍る
ひとつて信濃路にかゝりてちくま川のほとりにわたりてす
わあたり秋をこのきて十六日とふ上野はといふ所につきぬあた
りはいるわといふ名所の湯なと中風のきこえしなと哭て宗祇
を歩のりすゝ頭て二日さふなりぬこの湯にてしるひとあ
湯りあわすとゝさうてさ月の絵相をとてあしらひ
のこるにや

いくかもむかしの秋の月も見え
ころうしむ頼の花乃旅　神ほと　宗祇

文月のはしめつかた武蔵のいつる年也けり上かたへのほりけるハ山川
乃流れ又旅宿に皆泊りやすらひおもひあれてすゝし人々なほく
み白き所なと侍りしかとも程なく宮川といふ所にて十日あまり
して日坂宿とかいふ所に宿りして駿河の国八の宮といふ所にしも
みちの海辺のたかしまにもあひみえかもめの声をそ聞しかとも
ちかの浦にとまりして廿四日より十日の宮居ありて大宮のほとりにそ
明日十日は十二日なかも此事もこの度よりは駿河の国の府も
かゝまさに侍りし老のいの白地中り
なみはことさらもせうそこの絶えれ
八十年まていかゝこの忘れ草なるも
世しかのこゝろは何人もなし

老の浪まかつりとはえてなりし哥
ねたいはまいれそのの白みもやとかも思ひ合せる廿七日
八日さかに付ぬて廿九日するかの国にてかゝる所に侍る日の
本別たりのみちの前々はてそこといへるしおにあひ
ていふもと隔りしるしの笠と申とも言葉をかしきうに
れいつハせんとことほとりて旅宿をわれそ一夜をあかし
侍しそするかかの心の人の□えるいて竜淵るを
させて来りもかハ追しかくちの浦えて昨日は箱根山の
麓湯本といふ所につきしに昨の所ならすこしいのけれそ
ゆつけなとこひわするらしまとろまれはとめくらとの
とそ明日は此中を越へき由忘をささせてうちやすみしに秋

中ごろ世にいたり昔しよりわかれきたりてうこりし俳道ハ世々に定家
保まをすりしといひて翁の法ハ俳なりとて禅といふに至るを似せ
られしと門人道ハ或ハ子門弟子の句を其をとりみこれをひの
句を自作して捨置りしにつけ俳道なりとて名を附ふ
世にいひつ灯の消るやうにていはゆる俳諧ハ　于時元禄七年戌二七月晦日
諧人も伝ちなりきもなく皆世を思ひそもわすれ皆ありく
草の庵の家のなごりもなく旅をこのみゆへなしもなくての
桜さえ中々もさひ心して一世を旅しきたりて其名を道
祖神となむ

旅の世又いひ行して草まくら
其のうちにて夢さへ見るらむ

芭蕉和尚の俳句あしもと有てあもひえつらけるを是師也
をさらひて京越路きふけりあしかきへて各まへの中
まふりの人語きて伝くて語ハ世乃さかひ桃庵といふ所の山林
今もあり定縁ちといふ此寺の八重のあとにとちつきぬ
室一日もりいはかりそのつく月台まき此文字内ゆかりす
こしひきへぶ不知なれて活し彩あり枝さら又たらふ
そりおさめて杉を植しはた常にみしと思ひおきて一本と植
らんたりとてありし紀として七りかたところ所々因也
此ふましてしりかとこ予孫々見せことしも持し後の
翁俳諧もかるも翁を分しく行し也そりしもなほ記して
ひとかたうひて涼しかる冬十月につきぬ翁もすゝろ　後の月とくく

ゝと縁あるに名月隠えぬ芸なかりし
世におもふ月見神のすゝむ　宗長
かくて三年はかりの秋草庵にして宗碩水無瀬にあそふこと（ふく）
せのそなとなけくかのことをかよひ南里の心震ふして
一座ありし第く宗祇ありましこその比名月の頃にするの
曲をやるへき侍人数多なとありけるみなまかりにしと
らするかれしかは去年の秋のことゝも思はれてありし
今宵名月二ありつ一時にあかりよれまてなりにけりさて是
編もうちつまりけめと侍るにやとたてまつりしに此世
と名は白まく
くもるなをかはらぬ名残うつし秋の月　宗祇

定まりけるはしらぬ紀をる人　今川氏親
小萩原露霧さむく風こちて　宗長
日頃待し一つひの中に
寄月忘舊人といふ題をよく
みしよゝえぬ月の名をとゝめしまなく
ふるき人となる秋としそおもふ　氏親
宗祇をしのふ心しさとのひなきといふ心やは文
ありし山路の秋霧とおもひやる
清し世の秋霧にこれ山路かな　宗長
といふ上句をつかまつりしほとに
なこり迄も紀宿の秋風　宗碩

あれとひの身ひくに而句につねにもそなりさむ灯
乃中にふくかれに近寺にとものお物語り侍るとさふらて件
侍るものなりし
廿日海の月見のこゝろなれは宗長にて寺庵なるとき
うちあそれたる桐といふ所に近江にあり発句
雪の声ハ父宗祇花つれ草枕かな
この発句を案し侍し暁の夢中に宗祇に対談して我
雪の声と中発句とてありましく又雪ハいかにと云
侍に答て侍るとらて申しかるにあはれも哀に
折れ月見侍る
同日也一つひの中に

寄道述懐
身もちねの近いさまふさとも　宗祇
とくさてくと残さ所しも此寄
東野州に古今伝受并切紙相承不残了いの
判に素純に伝付侍りし事所下
同紀の素純のことそり抄りときて宗祇のことと
思ひなそいひとうそし
なりいてたし継承の完なしは
つくるやきつとも抄りけ哉
追し
こともや仰し継承の子也抄りりも

なと世にもてはやしつくらる何あら　宗長

料紙宗祇の作なる事の発句につけて文なとありし
と思ひおもふかくそや作し此筆跡を白川の関ちかきわたり
り富士を中んの事蒔を給ひておもちるなれは
風のつくる吹てもて作馬此地と宗祇の作人と
やみ横雲ゆめとこし来て文こそへて書とかれしき哥
来乃藤本の言乃書とりかは何日かき此世の
たえしそちる作者の思ひそ身を跳るかと
たゆわかりなれし作の月く三十日隔も
なりてきむ京のちろさし大東山に
尾く居の作るそのちろそも打しまれゆへき

いのちかは　おなし東の　旅の空　さらひ行ころに
後こつきは　作のなをも　ありつて　はけの梅花
夜の菱　霞ふかへす　たゆひつち　此山とものき
霞消し　跡とまそ　たつねはく　こく明山た
松乃色　あくかれそ　ひかれける

又哥

とく行くやたけくことここそ我世しも
あつしのあとの書のうれ身と

東路の津と　　宗長

白川の関にあまた霞とともにといひつたへし人家々の集とかや
此秋とさそふとて永正六年文月十六日とさためて思ひ
立ぬその日は草庵にて人々わかれをしみしはいかにひさ
しく
　風こそと行かへりつゝ思ひくるそをふかるゝ
われ独生ぬる露の命のいつまて古寄と思ひしか侍るかり
なりけるとは兄子といふ山家にとし七十の春に諸国のか
うちおきて奥州の舘にまかり侍るに壁乃宿世
の風雅道にて侍るといふかたりかなれた奥州ニ
　月此秋の宿とやみえし玉棲
あつしき家と思ふらんや玉かつし圓覚寺といふ寺にて

長禄登らせ給ひしも歌道のためとて一折興行

松ぞ人手にまさこれ秋の庭

伊豆の三島にてある人宗の法楽とて百韻ありし

けふよりぬ秋や来秋の法楽

祝言ものをなかるらむ如し

箱根山をこえて相模国とさる所にて館百日浮窒して

於大磯の浜場文百首よそぢことあり発句

朝霧もいつこと中る磯の浪

此の磯ちかき地眺望なるべし

八月十日むさしの国つぎまいらせしぬ上田蔵正

相模氏定といふ人をはからの陣之番く高間の住く所ぞ

中かりし傳へしに十四日あらて見る事中に及ひ

立帰りし銀分入八重の所ぞか

けふ家はうつろひ甲斐国にちぶといふ所さまで

ことの深山とは是ぞやいふ所にて入消山深き所とこそ見えし

なれしう山寺ありあはむさし野なり

家あと吹き秋風ぞ花ぞ秋くそう

むまし地ははるのさま如し

同十六日氏定長政定と彼是とかたらひくむすは

秋の萩原の中をわけて日ぐらし二日に分てて長尾

孫太郎の鉢形といふ所を政定まてなかりき

口すさみに

むさし野し末のおきへは名もえの
秋のかせとは志ら川のせゞに
けふハ鶴頭の杵橋よりむさしをさし七めぐりを発のこと
いつこもしらぬりりにハ家に二領ありて粥をゝ日ゝみ
こ杉山といふ人草聞ユく長井九馬介へこくるゝ領之入
くゝちつきぬ門にとさし橋を閉て歌文のとて入らりありが
みさふと云へ也やとさすかなはへすしく路へ云ひてりこゝあの
中の路一節ととゝとりへとゝもる人の志ゝるとい家を路て
歌中こゝふ人も高もつれ過てちふしくつきぬけあるし如人
情あるふて詠んこの趣くを歌ハありしゝ侍しこのあるさ
利根川の舟わたりをして上神宮新田わこ沈む高純照遊

ありて今ハ静寺とハ路ヲ築より都ヲへさうしあれハ也
今日ありて西堂二夜あり
雲あり　神に見えき那山々
地より是この路につきて白川の堂ありとてありしもつ本朱
く思ひ出ぬるなと述侍るぬ十　又静寺の額に
弱雲もしらてまさぬる小萩々
萩の鏡白にハいゝもりの風情見てなきけて浄氏西侍
ふかゝる弱雲をしらていぬる物もるとあり　萩を
なきれぬるその二葉あさうしす　又二日もりて　の経日宗候
三宮りてさことのぬ十　君松の路場を見て下宿ユ
花ユらまもとあし此　萩の月の庵

祖光もとより知音の隠志あり一府す一折の念ありし
つと白川よりの帰路とて発句をかり
　風のふよ葉にきこえる萩の声
小庵のさまなる　静和より前房まて
庵ありしへ尋ねてる学校の志ある侍といふ孔子の名
肖像をかけもてなす事かりこれひとつの学乃方も
とふらふ諸生の学者の庵をとりさけて日々に講じ
へりさまうしこうかの衰ふもみえるに依て設けし一之にして
千年院とよふ房を茶なとのつかへふとて歌は言にきき
くあるしにさ院主もと京洛中をえしき人の如くしるし
さくて言たか月みてくれは奇あり

　紫風轍やいはしくす柳かけ
ときといひて船目へ行く日を経てきて東光
徒流奥羽よ
　風はさりし松吹き萩の声
佐野を立ちかへりし行きしかへり万葉集に此田の稲と詠り
ふる橋はあてりや言の葉あり小児の寺にきたる
菊のさし山上院あまた奥羽
　と詠よりや菓さへかふかふ萩の花
たつ萬ふうへふふやきむ仏前の言の寺にて
　秋風いまり年なれ秋の野ぶかくか
堂の秋野ぶかくて此あしさぬ十　同終おちた集をて

みてありしかりしことと古かりし義は而も坂本衛士
十重をかり傳へて古河とある而宮の月の門に出居
其葉末の名簾其の方にて崇徳あり文せしとて中つかひ
侍り中風にて身つかひ身もあらすそれより主上に
而へ持参所の備前世事にけなされて上事あり小児執筆
ゆき是は村上の事はあしさか せちへ
はあしこは継色もうるしむかしの流ちりさんとかれは事
を中務の備後房これ(かは)使ひて兄にまかりてうちまことに
うちえみまさしし哀を郁しも秋なりけるこそ
明方やむらの小しは 此夕煙
夕のけむりを秋のあさ方とやと見へ侍るもかなし 打哀と

たえすりして
わらつまちはむらさめは八しほの秋のまほ
槙葉もつゆ夕かりけり
人くはもあまさあらせ定むかの八しまへて槙葉より 日光
色をのくらちつきて康頼とて而信房文流後守信実の跋
へいろくのことのもとに侍らんそのあさ事を見えて
あひそもならんとておくらのあきさなとのあひさに
ワカえつて 見渡山を秋の夕祠
而色なりけり わまりの紀しきもの幼なる謝し
つくれえありけは而名寄は入りと其總之新保院と甘春
云や、うまこひこれむらくさらへかゝる人へなれをもを(事)と咲し侍る

そのかミ之康保ころ日光といふ宰相の建はしめの夕こへる日にも
ひる縁道へくもあらすしやかはまりはしつくせるの段な
遠いたく のとなりさかゆとの人家数もつらすかりつけて
京極への市町のことし此ころつらかりなる完成此にて
いろの寺八寺のさまも茂き松杉森青すましつり松橋の
景ながきもなしたの谷す大和川なりて遠おす藤あ宗
の岩の滝す橋ありなすさ半丈之中とそらして橋も三寸之
ふり山すけの橋いひつすうとなもはけ山之小堂あるを
不動集まあり此の石をえてすその日の入定のかたに
読泉房につきぬやそ吹くり只ハ詠浮院かしてたちあり
世こえ秋とおもえかけり の源山かな

当山常住不退如法信者繁栄法堅固なりことを述侍る
りかね下数宗入てくそぬ執筆ハ空の十七八才やおもひ由も
持一部経日の奥とあさかくす侍る蓮源之なそいふさる
かくのまいりあひく数五ままて空もあますきあそかく
ひ辞して仏中をありしろき首裾ふ代をとおのえさる
仏塑りにもおはし同性紀法しそ阿弥陀といふ別に坊なる
小動堂も回廊ありひさうゑかまり成かる門ある 松本風二千
溺之によたへとみり(?)なつくる中のはえくとたつとてなのつくのる
花より石をこえあるをは降く伐風をとまて大百房ろも何ある
めんかし中様もとて平里ふた湖ありそのやはさ寺なり
京都本へ六千里なれたちこ行て以外の不をんみえはにて

縦塵文日記しくさ　近寄也

きくかへて五枝や宿は庭の葉

わすの雨極にくちら枝のうすの葉

誰か伐る人のものとえ知らむ

と風なお侍らかりなり十あまりに坂本へ行かぬ

と承風いくめて日暮まて呼らかりけれ此晴れ月出

南また侍りき侍らまことに切りしまき神またち出て

つまつかりあらくこのうちもこうやいつ見てもくあやしくしく

えてありさま白川の関此月いつか二十日頃の程と了

これ大那須と湯本ここに来て合戦本にあて了りしむ

一宮人の許ひもなくあれも那須の奈いとそれやの宿とせむ

ひくらのさしひと見これは日数十六日かかりに行つ了見えと了

日はあるもいとかりつきしも行くもあれ路をひてき白川

中河なて大河洪水のなしさて下りに渡にいつとめ了滞

有りも益なしきらいくち海の旅きにさてもあまりふぶ下

くもき悩みとおもへて

かかりえて行方ふと快晴し名のなこれやこれ

白河の関おしことか此に来居不労の人はつきさ

因りこの之のとふくも河豚なとせららい後会

何かくの身なれは名馨に国沢是杖紀の思なきまか

すわ十三日に壬生の鉄砲海東方の南風義も笑も南手

大海一夜車地のことし十四日午刻たうちは晴ちら十六日の名

月さそ発句作あり 気色の発句古来越白ところきはめし
いとしとあはれをもとめくることなれと

　月と秋ちりもしらしらに雲も別し

と秋の暮ての句也
十六日 小大峯といふて般若寺そて山寺を佐野への路にて
一宿す 翌日上遊寺あり

　麻の衣や深さも秋の峯の雲

松松の山深き思をこめたり 句也
十八日ささ出へ文てつかさけも出てゆかりここに別れしそ
きはめ文あといひ袖をひえて
　六十年あまりれなし 二月ゆ来ぞ

　荒りる先に花身ともいのちむ
綱章と生阿用とこれお出ひ よそへく句との仏ろ
そうり也下

九州道の記

細川藤孝

おとして天正十五年三月の初関白殿下九州大友浦津征伐の御
旗をなひかし発向あるへきにて御発のよし左兵衛佐一郎
同玄旨萬元五條の二家との御供なれは作善の
かてもかりまいらせてさるへき五條のわたといふつまにて左馬も
宿れたるを程もなき地にして同月十九日に京を出て北の庭まで
日て廿一日因幡道に出て松金といふ名なれは庭に旅寝して
其に西の方へ修理晴乃なりしかは松井の律師と云ふ者にて柳
菊の道成ておもしろき庭にいて色をして賦ひそまりて其夜はいと
よく晴て風も匂ひのなきに松の本とて又今日出立ちかきは

かくのことくの旅の行末は若狭よりさそてこえゆる道の山
軍書に欲必則莫令卜問軍事と作れは如何ひかれるかゝる
川とて漆といふ所より辰時斗に出船して五月の暮方を経る
関帳のきひ居組といふ所に舟を寄せけるに旅宿いと不せくて
上なりけるなかりしきかり物して
是より旅川しあまりは里の名を居組川といふ浦の宿にうかひ
十六日伯耆の国みをり蓬より舟を出しかへ出雲国に保の関まで上り
又霜し侍りくそれより猶つゝひと所に錦の浦といへは悲しく
船とそして見て
船より錦の浦の夕浪のたてしむや海の名はなかりけん
かやうにはすきみてまつりをまかると、いふ宗源への夜をこそ
明りぬ

急ぎてはいまた乳房と含む海人の子のかくの何ところやすらふる道もさらん
十七日西風あしき程より船を出さはかゝるへきよしと船人
申侍れは、いはゝつるゝ人も梅のしそて船とは流罪と
申ちまさし侍るへきよしやて杵築大社のさめかたちそ
島より出雲の国と三里斗へさて出ふかくて山のうすみ心多く
なしぬ社司とよめとりて神人を召さいるる所従しく尊き
さまの大社之神殿はさなからよいさなきのそるとおし、へにかはたまる
く物語し侍るに日もくれけるもいつし宿りは衣あかへん程の
旅そりとさとめてそ帰りぬ
千家根神の別、御やまはとの色うち社つら西の柱
十八日佐陀と申て社鹿といふ所まで湖水の小舟にて乗て平

由きて清き浦なりと旅人のいふを聞て

旅枕うらみやおもの浦なみにこえてぬ夜のさむさかなよ

かくうして出雲の社に詣る程に彼の社にいりうて宮あと

神杵築の社に御社なりこれにさへならべて両社両神同千

家北島といへる二人の国造とそなへいひける家の家にてかしてそ

は宿とかりて推参にたうまへしとりける所なとしひて出雲

に在る所の荒神の舊跡なと云その名は誠にて對面しける

大穀なる人にてあ杵荒あやうく因縁ありて一義をさきよろしあ

逢ひけれはそて寝しけるに両国造とか示てつきぬる者も有る

と任ふして是を見るのよし笛鼓の役を是非にて夜

更まて乱舞ありける思ひかけぬ事なりしさ

ち九月朔日の夜はつるおし木也けるていそきみち

乃き日も過けぬといへは色あちこちし天

は神の御てにあるものを業をかねる是や向あるらん

建千鬼盛尊に到る出雲国造は第一宮伽とかきしは中

く宮の数をあまたるとも向きるなるとも云々し此

かんは縁に人千家方へつかはしけるに一方へいかさあるへしの

いひけるは儀なれは同意と書く中りぬ又両社御神より答

句不申なきしは

和もや神のいかなれゆふかつら

かゆへよつき申りけるを千家方分今の際白ゐは御請して

返事申さん　右の方まて両顔具同す也とそ今はなとこ

ちゝに遊来て翁ゟ不遠之いそかしき旅のさまことにあはれ
やもしらてなも旅の思ひよりもさりかくれ侍る人の句を
おもしろくさひしくをそれにおもふ時るの名残をしれは

幸ひ行きまつしも世を人やしらの浪

古九日ならんの太もとと不古まを毎にてゆるあはさに何とかゝ
津近ひはえんの浦あはきとかふ古るまもまた浪を信りて
る磯山のいくたをとしるあまりとこきゆそて
出也やしなし(かるる)紀母を海なみのうらなんの浦のほつき浪風
それよりやそ浪山の出るてえも山路をつ城主示のさ入まえ
とるく

妹の名もとひりな也やカふうりも同じ浪と山路有して

やとかりもせう芭蕉翁白不竟庵あるし桃の里とつゝく
此山は法中にも甚ともやせしかくく
温泉の津とおく宝塔院に宿りゐしてんみし暮の一夜と入
せ廻りしかとかはらぬ中あはれに廿日二日　翁白不竟
にて手折る石貧とつゝる鉢清けぬ
浪の江(こゑ)にさし鴻ち花あれ残る卵
廿日出船するにゆかても一折追ひす(浅)より出て翁白不竟
なき也は高砂けり
うれしけ州の条にて廻る比あやめか
七月濱田と出しけりさる南と北ふかを命りこえ出り
て月なえ日こたつの山の木の間よりうき世の月をとらしそ

めくれは人丸の旅をしのふとか
うつりゆく世ゝと後の世と朽もせぬ名をとゝむる前の松の
ことの葉さへくちて世つきまさり様のうつろひとみえたりて
ゆくかたいにしへ許りこそ今も世の言葉なりけることとおもひ
いて
ことなる人の命なりても世はかりそめの浪のうへかな
同しき玉浦小畑といふ湊に尾張の舟そのよしと人の
ちまかうりしれはさらにて聞えとてたるなに舟とうちよせし
そのかく
秋も又浦はたひにて見るぬ唐船のよりし湊の
うく波のこゝろ安しききは

小浪さえの胸さへ風や合すらんとある夜やことの浦波
十日也こ様とふ所を出船をしに風あらくして高波まり舟を
まこしはる中之白日しつるち見えこひれちうたかしくて浦をと
うしあつる跡なるはゆきは風もかへすへきよしといふて出降て
舟の人々と共に中々はるすされともけふ里とも行かちな人
高かちしてに有りける出不よ帰りけれ打風あらく成りく
草木をも吹返りて何人の家もあるは吹きも見え出たる舟
は波にたちさりけると人は命をもいとひかるはちかしてその秋
は稲との穂さけも吹の名残にや打ある風いまはす波のおとし
あまた日ひてたゆきしは船の出へきやうもなしなと船人ともあへ
ては久しかりき家のうちより出へきかし いひ合せてつるなと

あくて十一日せとさびしさ出て大山寺大円菩薩のをかみもして
こゝの寺は定恵上人の開山とことはりて日本初の寺なりと
いふなる事はまことに仏法のはじめ行けるとなそ
つきせぬのありさま多く有そて
かゝる仏の御てらの仏たちも法のむしろとなりて住えも
仏法弘通の中の方と聞えつゝいとたふとく夜浦
家とさだめて
又その池の中の宮とも田浦の寺の跡とぞある
名をひとつにてまたひらひらんとそかりの国とか
まあるそてみかえしとあくらつ海のけしきてさえる
とりあへず侍りて

さし入て行へる足の西ゆくいそこ十町はかりひとつの寺ん
寺のころはいまそ須磨寺に着て侍る寺のしはしもとなり
所の人申とかなんいひ伝え侍る寺僧申て安徳
天皇御寄付一つの像も見侍り若木の青葉の
短冊なとも見せ申しに其外あまたの歌ともありしとに
宝物かく杖ともあつまる須磨の浦の波の旅枕
其あたりの名所あり
古郷ことに涙一つもかなしく涙なくとも此寺にて
名所を見とりてこゝの日高きなき
来てみれは逢もなくて住なんの浜
其あたりの柳浦名にしおふ一首せしに

早鞆の山にとゞまる事并前文

同月廿一日赤間の関に着つきぬるに為の名残や波風の
おもひやる人あまたありてけふはかれとこれとにつけ身にしみて
筑前筥崎とさして渡る西人の志なん宮嶋とて芦屋をも
過て舟を乃せて来たり侍ていつしかそこかしこと
いふ日和能きにはことなきよし申すと語る動揺石ありて金
といふ字をかけると見えてけるに踏ゑてみるべきなど友とかたるに
に語りけるにこれや筥崎すゝみのすゑ語りて中ん侍
見るまなとかたらひあかし
筥崎と語る浦の濱と渡り舟をこれは志賀の若宮の御前
かやうにいひ為をまちて漕渡わたるに夕潮ゆくゆく見て渡

志賀の浦より金剛山の香連坊と語りて当社大明神の也
来なと見けるに春日明神当社同し出雲の神之と物語あり
縁起なと見せ侍りて見せられしかれて浪打際の汀の松乃
うへは三渕ありつゝ浦の中のほと当社の鳥居の神社侍の
語りあへる文當社の神楽の神社山よりつゝく一向詣りたるを
見るに侍るに遥かの方を廿三里計も海の中をわけて浦よ
つゝきたるにそれは十町計八十町ほと計も
見えつゝ文珠なともましまさは橋立のことなと云ひて
へうもこ当社は安曇磯良丸と云く神功皇后三韓退治の時
誘ひまゐらせし船の梶取して海上の導せし神之とそ
しるし侍し

みつきおきてやがて志賀の浦 神の島の隣にてなきれハ
名にしあふ龍の都の波とのそ波とふ中の海の中に
いさをとを申す神功そて廿八日朔なほきの神に筥崎に詣りて
見るに松原しるくつきさく八幡宮ハ小高き山むひて立てる
戒定恵の三字の額と昔より川まてはるかなる一の鳥居とて
古木立ちたり
その所よりつし寄へる筥崎の松そ千代のしるしと見えける
日ころ行き覚えハ博多の町まかり見るまて神浦と望めハ
のおもしろそれハ
いさ行かん八ツもこ時まてに箱崎神の浦の波のまにまに
日も暮ぬ過さぬまにて行くもまたあらん志賀の嶋ハ神の浦と

廿六日宰府ハ天神の御ひしまと申し参りて宮のまいる
名る波寺も八七ツ計ささえたてそえて右の計なるかりやの内
四所の宮社松枝の多くきつはこもりにの所に後ハ書よ
そひえてたの方七八丁斗もあらんとこえて観音寺の松に西所
ともいふへき石之花梅も古木ハ焼てきりなきえの生茂
くみとえく
宮の朝を過て花梅のかをりハいそきて来まに見ん
と迎へりそめ川と里人にきゝて見れハ流之ひしにいつか
しらぬ河の瀬キ流之打渡りて
色の波もつく帰る深江やなとなりてふ心斗と
あゆひ川まて

くるし都の行かたやむかへむかひ川

さいうしこえのかりく路りける所にかゝる今の堂の跡とて杉うえ
きたに今定の体流石のしるしとて路ちかくありしと傳へしとて
石のしるして御堂をとき陣跡兵粮米やかる今の堂
しけりとせめと山いつくそと案内をこうて路ゆきの左にて峯山
を見なん人を近と云昔ハ亀山宮謂ちとて山伏の住りし所を
なるとゝきくすひよりそる楊らは楚てありちゝき君臣の体
攻おとし明智あけちなりけれは山伏の隠れとかきに有哉
の名をは雲のかゝりてえしきゑハ

立住く雲ともゑ里のきりくもそ後ハ氏の亀山なる

可也山まで

あきらわかやの山をこえ入廉ハ秋より霧うちの道てふきえん
蛭濱より入の出云の塩務あこちにて目利して後なを陣ゝハ
ミ二城へきとて文を出すよ

こきさしの代そしといい安吉のなすこ角しけれ銘の濱の方
ふ入り蛭濱とゝて下て鉢りを通より出松原見えまかりて

すゝしさを風の行とて見ん人々いくらゆうハせの松原

蛭濱にて主人京助物まてきし亭の信常とえ出てた
く出で日をせしに

出還も又流道て其比ほうくさの汲のわつらひとかそへける

六月三日蛭濱興徳寺住寺平芳寺然和尚和漢興行有へ
しとて発句を求有しに之ふ縁せ不然ハ旅のさまいあまりハ住行

いぬる比年ごろ参籠して入覲祈念せしに

風にそよぐ菖蒲も扇川の扉の御

社　同　六月梅

同八日利休居士ゝ菅原氏後御座て志りし曲緒ありて後
一枝を植置て紅白を分ちつゝ定めきよし聞しハ菅家廟の色を
神代にも言伝しきくし松の風

雲の外をさきだつ紀のつき　　松

石の上にふと照り雲の勇もれて　日施　郡大領て
筥崎の八幡の門菅原氏おりし所となりて書きてきこしに古き
の松まうで給ふ其の句を紹介するもこれなる
翁をいふよ納めよ筥崎の松よ千年も君が代のとも

菅原氏筥崎の松原にすゞまうべきよしにて各来臨せしも
ありし吟花異の事を扇しさま此謡ともなくて此句をよみに
立ちよりての湊の夕涼めがしてる凡石との浦風をふく
菅をとて吟ひとのかおりて松原を名残惜しみつゝひとりしほ
りかへつゝ帰るべきよし　あるは
松原に名残る鳥の声をとゞめつゝ　曲水も嗚呼吟さの処
六月十日吟客らの往て香椎の浦に立まうりて
海原や枝垂る紀の風の香椎のこゝろ　波立しも
吟さんハ海辺をおとなひひとゝのさゞれへ出て多々良濱を
歩まで行く
いかしえいにたいかしの処に来て今も吟をえらうくもう

從ハ對するの古優寺跡より けふ一そ古しへを見て心ある
古寺作り題をもや故郷のよし使の人ハ高祖父中任て語り居る
安満の北をる浅なる浅子を経て無人さ家族の雲
卒用和歌韻
始識途君所鋳鐘　向来相約対閑窓
帝都門外莫言遠　千里同風一樹松
古ハ波のへ々まさ山の腰風をすしはをかりか立志雨
発句
青をとり立ちくもれや雲の峯
六月十五日一折済み立けるとて淀口大坂へ不帰す
涼の声と秋風ちかうしる雨の涼

あまさかる鄙の住居と思へバいつこも同しらん世なりけりや
と千宗易よりいひおこせる文のはし
ゆきさかる鄙も都もなき世なりこも同じうきよの世
なれとも廿七日言可夜能龍あまさかれおされて筆をと
いけるまいらせし謹て儀に一折認さゐて發句つかまつる
べきよしあれハ
夜竹に龍のかけ社ある　松
すゝしさは洗ふ母のさこる丹の月
古ハ寂の庭のひまと佗ひ来く　由巴
七月四日閑夜雲のうつろより滴ちる露そ泉に落よし
雅にするなとなし来て南の海にかうてよしもと定ち待

すゝ秋風ゆふにあらしといいて船なうて六日まて逗留侍り
て思ひ侍りける
なとふく風やせきの泊まりふね
六日にも舟のおりしもさ風なりけれは周防山口の地のね老松の宿
とあつかりおりして船出といつまて逗留して七日に山里おりぬ
と頼ハ七夕のあつかよなりけりとおもひあへく暁りさのねさめて
七夕の別れの神もうらみんえよ袖なりし旅の衣を
八日雨しる社えめくりて同じ住ける天神のほとりにきまいりて用意
せしに南にあるの社に一夜ありすへきとて出まりて留
逗留日ハちのしなくて日ハ逗留して六ケ日
と云月といふ事ーしれの由なり

十日山口とおなし所てはしまりまつふの浦といふ田島に着きて上船の
まいりと浮て出すに南にあたりて高社の住侍る東坊住侍る所を
あて一両なりともつゐに大きて逗留を入相の時分より
神て教まゐらせむとて百首よみてけるに時は空きて
法楽あつて神の御ひかりそ元徳まつことあらん哉
業をけふ大川こそ風のむかひ
田島をの浦をてまつふの浦とんする陸ぬこの名くれけるにして
あれしハ
吉日地とあさる浦にこそ松まつふの浦の風も住吉川
十一日晩に田島をと出くる日ハ上の関とて舟をうけて明けぬ
雲とてもまさて浦にひたして船出を催し浦の山家雨にとふハ見あ
りて

あかきその路なりとても海ちかさは弥山もしらしなしてん
廻廊より客人の宮へ廻りて社頭をみるに舞台は海の面二町斗と
見えしてそのまゝ回廊も柱は潮にひたりてあり社の
奥をとほる潮の下は清らなる社の板敷の上まで満ちくる
けふをまて高く社頭の棚守の館へ参りしはまさりたて
月なりぬまでは立出て見る所はうんうんと潮干潟満月の夜
廻りて汀に三町斗も奥を廻りぬ二つ塔は多宝大塔の寺なと
宿坊修行の理りあるよし又大聖院は坂を登る所にて
十三日一条の本宮の社の後の池といふあるよしは

新らつきも月やかゝえんの池の水

十四日も　棚守連歌興行すへきよし使として日に来

またいつきなきやうにやまといへきとて辞退申けるをさらは発句斗
をと高く望まれけるに郭公の鳴きけれは

秋かまさたし山さけ山本郭公

かやうにきこしけるにはうち吹きありしすへきよしあまたは
御供の色々の者とそめく道あまたて子息備前守
法楽ありて執筆あり脇は拙者とかくて陣僧りし中にて信不
は奥の坊といひける者よひの雨降の夜向なとか白へ歩出しに
るに又鳴る二声三声なきけると申けるは何もかやうにうちと為
しみかうしきるなりとは一つそしおそてきこしける
其の山とそや来つけるまつ松の戸に鳴なり
十五日文治袖おそて延年といふはしはへはえぬして松本

氷上に月を出しためての浦に名高う侍りて又今宵は此のはしに往

所に来りて十八日舟鞆まで越侍る竹田法印かりその

宿なれとも亭なとのさて涼しきよしあるしは立寄て簟に床

日たけて葦原に月を出すへきよしと云ハ

名残ある月やまちもはるゝらむとて舟

それより紀伊(?)秋月を見つゝきて済の此方の分しく備中の国と

あかりといふ所にける山を見しかはいとなけれとも見つゝきの国分と云ハ

此所の紅葉との今雲晴といや高山の姿をそ見る

十九日備前の国部にいふ所よりたちかへる[illegible]

待にきて舟をつけても出すへきよしをいへハあつりもせて

かゝる枕の月と見るもうき旅のなかまハ

明ぬ待てなるを出ぬ月まさへ[illegible]の沖なりせは

みつる月の秋あまそ行き出ぬのせとといへハ

秋風の身にもしむかな明石とも此半夜出ぬ四門

風あらくめくる其の浦といふ所に人里も無き所に

旅行侍り

夕波のその浦より出こそ此月もひかりを旅とそ見る

とつありて波高に舟を出して播との室の泊とこへ

去やしといふ所にありしかときかりて湯のしほといふ

何まハ

拾ハさてよ紀るとなれや鳥への鳴き帝しを思ひ入てつれハ

廿一日此ほとりまかりて舟を出して[illegible]

いつ中あらひてさまよへる 我なる潟と云ハましかと
明石潟と云ハ堺を越えてこなたなる加古川をさかひて海
の西よりこなたをかく云なるへき水上に大蔵谷より佐上ハ西
まねといへり
乃あさ野も西に加古川湊ハ海より来れり
かやうに打誘はれ行この高さと清盛て高砂の浦ありしを
けてそ秋ハこゝ西ハ行けは
高砂の尾上の鐘も松風も行この高さの浜に負えて
見より松帆の浦ゝ也せんと其三日の晩秋舟を見て須磨
明石のこなたより上風をうけてつけても引くと何とも浦うきて
須磨の浦風きゝ明石かた月とそむけて見た

播磨なの浦ちかくなきハ舟を出て見まほしの月 淡路
かひてうくなりけり
風ふく松なの浦の音きれて住よしとうむ明の月
又須磨といふ浦とえ見る山のさかなりて高砂の鐘ハ
浅香も波路てなかたゝ見山や誰の白鳥か
須磨の浦にて
須磨のうら里のおの山出や姫の尾上や標かし
くさりける乃と波の行くなる見この明石をこきめくり
て生田其を舟より見やりて
生く舟の夕波あらく城より見てそ生田の杜の秋風
二月 丹後をおもしてな見を人御使の時ハ南の海とう

日本政府圖書

て七月廿三日といふに新潟にをゐて老のすさひにかきをはる
日の本ともなれは手をかきて書はしらくおとろへて
なかきはえのほとりきわまりてをさめぬる
是芦原浪女かきて集むる庵

日本政府圖書

国立公文書館
National Archives of Japan